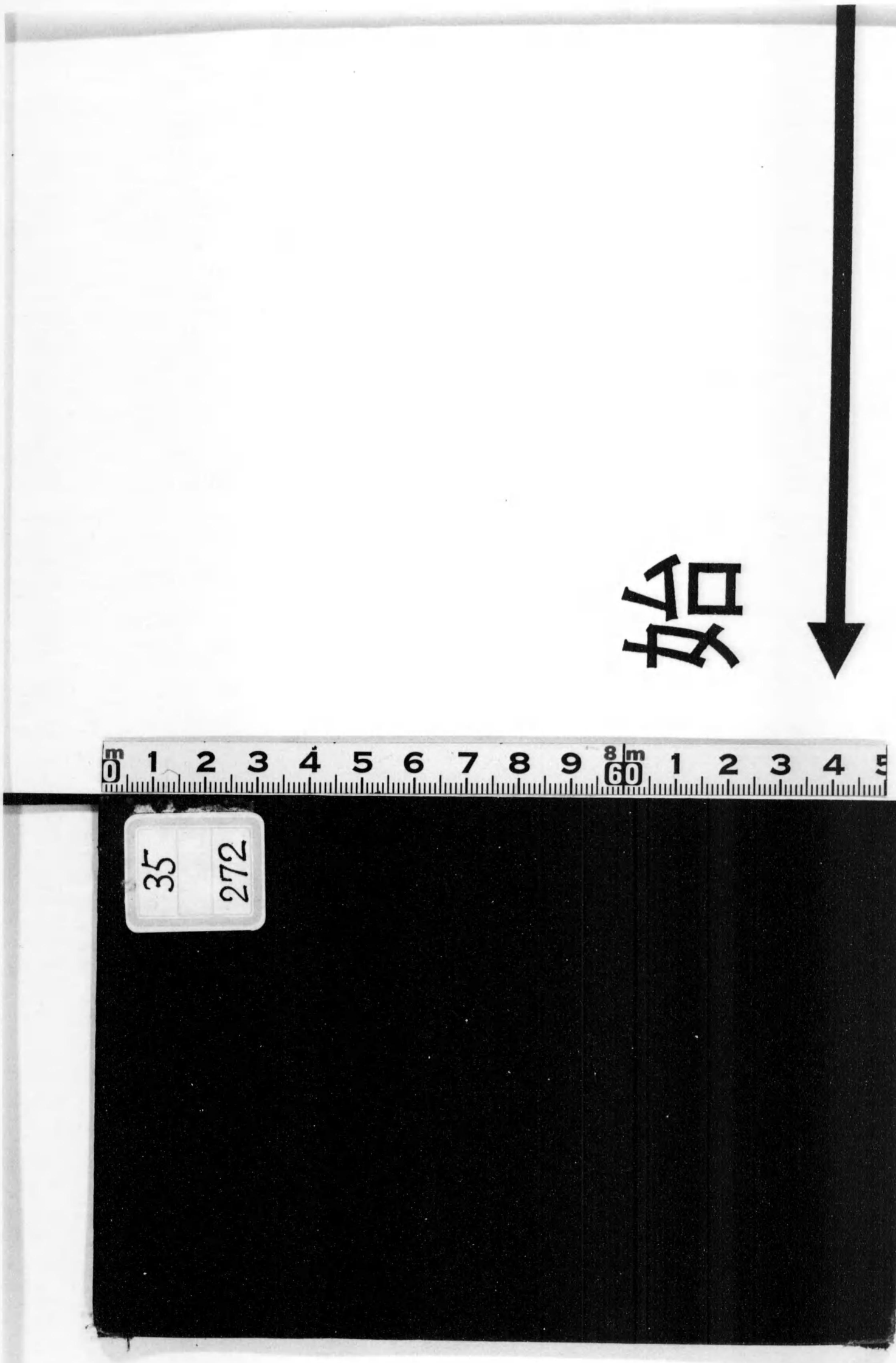

35
272

始

35
272

名家近作叢書

第壹輯

小品集

泉

田山花袋著

大正
5. 6. 2
内文

序

二三年來書いたものの中から、旅行記、感想、小品などを輯めて、今度世に公にすることにした。『泉』といふ題をつけたのは、この頃、作者の心境に、ある變動が起つたことを紀念にしたいと思つたからで、別に意味はない。今では、この集の中の感想とは大分違つたことを考へ始めて來てゐるが、しかもそれ等は皆なそこに達する一道程一宿驛であつたことは否むことが出來ぬ。今までは私は『泉』の涸れることをのみ慨いた。しかし今ではその『泉』の溢溢して來るのを待つてゐる。

大正五年五月

作者

目次

平野の雪　一
川の印象　二七
北武藏野　五八
扉に向つた心　八九
ある人に寄する手紙　一〇四
山の寺　一二〇

目次

痕跡	一四六
廣い空間	一六三
海とトンネル	一七七
ある小説の中から	一九四
旅日記	二一〇
僧房にわかるゝさて	二三六

泉

平野の雪

田山花袋著

利根河畔の町にある淋しい寺から出て、私は一週間ほど關東平野をあちらこちらとさまよひ歩いた。そこには私の生れた町もあれば、私が幼い頃丁稚にやられた町もある。欅の大きな樹に吹荒るゝ凩の音もなつかしければ、路傍にぽつねんと立つてゐる道祖

神に夕日の微かに當るのもなつかしい。私は近頃にないひとり旅の面白さを覺えた。

足利の町は、山裾の町といふやうな好い感じのする處である。ことに、東武線の足利町の停車場から見た眺めは一層さういふ感じを深くさせる。光線の加減で、時には押詰つたやうな陰氣な感じもすることもあるが、概してくつきりと鮮かに繪に向つたやうな心持を起させる。それに、此處に來ると、遠くに見えた奥山の雪のかいやきは低い山に遮られて見えなくなつて了つて、一週間ほど前に降つた雪が山のかげや襞や日蔭に殘つてゐるばかりである。

汽車から橋が見える。それは渡良瀬川に架けた橋である。此川

も私にはなつかしい。ある本に、昔の佐野の舟橋は上州でなくつて、この渡良瀬にかけた橋であると書いてあつたが、成ほどさう觀察する方が面白いと私は思つた。類聚國史にある驛遞の條を見ると、昔の奥羽街道は、高崎の線から太田の線に出て、そしてこの渡良瀬を渡つて、佐野から栃木の方へ出て行つたものと見える。萬葉集の安蘇山は、卽ち今の足利や佐野の背景になつてゐる連山を指して言つてゐるのである。

安蘇のむら山——實際此山群ほど襞の多い影の多い光線の變化に富んだ山は澤山にないと思ふ。利根川の岸に立つてそれを望むと、殊にその感が深い。つまり上毛と越後と下野との奥に横つてゐる大きな山脈がすつと關東平野に雁き伏してゐるといふ形にな

つゐてる。そして馬の耳を立てたやうな形をして筑波は離れ島のやうになつて見える。平野の海の唯中に浮んでゐるやうなさびしさを感じる。

渡良瀬は足利から五六里下で利根川の大動脈に合してゐる。竹藪の多いのが特色で昔は岩魚といふ銀色をした魚が澤山に獲れた。私は朝早く兄に伴れられて、そこに釣りに行つたことを覺えてゐる。

關東平野の山の雪は何とも言はれない程見事だ。日本アルプスなどよりも冬の眺望はすぐれてゐるかと思はれるほどである。中でも赤城がその中心を成してゐる。關東平野の何處からでも、最

も近く最も鮮やかに見えるのは、この山の雪である。旅店の窓からも見えれば、林を出外れた路からも見える。ある町の街道は眞直にそれに對してゐる。馬車の後にいつも離れずについて來てゐる。かく思ふと、あんなところに、赤城があるかと思はれるほどである。

左に寄つて見えることなどもある。

關東平野を横ぎつてゐる汽車の縦線が二條あるが、それも餘程先に行かないと、山の雪を見るのに遠すぎる。信越線では、吹上、熊谷あたりまで行かなければ駄目だ。東武線では、久喜、鷲の宮、もう少し進んで利根の鐵橋あたりまで行かなければ十分にその眺望を恣にすることが出來ない。唯一の横線である奥羽線は、やゝ遠すぎる。この線では淺間、角落、荒船などといふ連山がよく

見えない。下毛に入つてからは、日光が見えるが、そこで見た日光は、利根河畔で安蘇山の上に見た日光とは比べものにならないほど單純である。

今度の旅行は、此横線を主として歩いて見た。私は太田から妻沼、行田の方へと出て行つた。つまりかなり近く山の雪に迫つて行つて、そしてそれを離れて見やうとしたのである。

川俣あたりで見たのと、妻沼あたりで見たのとでは餘程感じが違ふ。同じ利根河畔でも、山の開け方が違ふ。前者よりも後者の方が餘程ひろびろとしてゐる。安蘇連山の平野に靡き伏した具合が實によく見える。

『妻沼は川向ふだで、此處で下りて下せい。』

かう言はれて、太田から乘つて來た馬車を下りた私は、ひろい川原の眞白の殘雪の中に紺青色をした川が一筋鮮かに流れてゐるのを見た。川上には、河川工事の浚渫船から黒い烟がもく〳〵と簇り立つてゐた。

舟橋――なつかしい舟橋を私は一歩一歩渡つて行つた。誰も渡つて行くものがない。私より他には誰もゐない。水には冬の冴えた光線がキラキラと光る。私は一歩歩いては振返り、又一歩歩いては振返つた。何といふ美しい山の雪だつたらう。日光群山が殆ど手に取るやうに見える。中禪寺湖のあるところなどもそれと指さゝれる。大眞名子と女峰との間にある富士見越の凹所もはつきりと見える。私は山奥に冬籠をした若い僧のことなどを考へなが

ら歩いた。

淺間は何方かと言へば、平常あまりよく見えない山である。噴烟の爲めばかりでない、一體に雲が多いのである。しかし、其日は實によくくつきりと晴れて見えた。その左には角落連山の雪の日に光るのがキラ〳〵と美しく見え、やゝ低く榛名の尖つた山が靡くやうになつて見えてゐた。

街道の藁家の軒には、萎びた細い大根が干しつらねられて、午後の日影が寒く斜にさしてゐた。道は日當のところだけは乾いて駒下駄でも通れたが、林の蔭や丘の裾などに行くと、半は溶けた雪が車の輪のあとを深く食ひ込ませてゐた。

私はある家で、大和障子を明けて、敷島を二つ買つた。

『今日は穩かで結構ですけど、わるく冰みますな。』

かう言つて上さんは釣錢を私に渡した。町の入口には、小學校があつて、町の青年會があるらしかつた。名高い大きな聖天の宮の杉森が黒く前に見えた。

此處の聖天と太田の呑龍とが利根川を隔てて相對してゐる形などゝも面白いと思つた。義貞が笠懸野から出て來た時のことなども頭に上つた。

聖天の境内にある旅館に私は一夜寢た。顏の綺麗な女中の手が皹だらけであつたことや、厠に下りて行く階梯が折曲つてつい

てあつたことや、裏の小屋で指物師が火鉢をかゝへて障子の桟をつくつてゐたことや、夜着の襟の汚れてつめたかつたことや、夜、青年會の崩れの町の有力者連中に騒がれて困つたことや、町を通つて行く獅子舞の笛の音が旅の窓の紙に顔へるやうに響いて聞えたわびしさや、さういふものが今でもはつきりと私の眼の前に殘つて見える。

それに、今度の旅で、私の一番困つたことは、私が早起きだといふことであつた。西長岡の鑛泉宿にゐた時は、それでも湯が六時半に沸くので、拍子木の音を聞くと、すぐ飛び出して行くことが出來たが、他では何處でも下で起きて呉れないので困つた。それも、此處等の田舍では、大抵料理兼業で夜がいつも遲いからである。私は其處でも起きたばかりの下男に戸をあけて貰つて、寒い朝の空氣の中をぶらぶらと歩き廻つた。

聖天の本堂では、僧が集つて讀經をしてゐた。林を通して來る朝明けの氣分、明るい日出前の光線、しんと沁みわたるやうな寒氣、ところ〴〵に固つて堆く殘つてゐる雪、その中を赤い毛糸の襟巻をして、元氣よくあちこちを飛ひ廻つてゐる子供達、さういふ境内を私は靜かに歩いた。

樓門の上では、澤山の鳩がく、くと啼いてゐる聲が、遠くで聞くエンジンか何ぞのやうに聞えた。『さうですかね、あれは鳩の鳴聲ですかね。朝、起る前には、いつもあゝして鳴くんですかね。矢張、夜が明けたのが嬉しいんですね』通りすがつた爺さんをつ

かまえて、私はこんな話をした。あたりには、既に目覺めて、元氣よく飛廻つてゐる鳩が澤山にあつた。樓門から下りやうとしてゐるものなどもあつた。

太田にある金山は、ちよつと特色のある面白い山である。標高が小さいので、遠くから見ると、丘陵の一部になつて了つてゐるけれど、汽車が足利驛を過ぎると、その獨立した山容がすつかり見えて來る。新田神社の華表の白いのがはつきりと眼に着く。上に松の面白い形をして靡いてゐるのなどもそれと指さゝれる。『他に木はない松ばかり』實際松の多い山である。

私は太田の呑龍の門前で、妻沼行の馬車を聞いた。『さうですか

それなら、ちよつと前で中食をしていらつしやい。待つてゐますから』馬車宿の主人らしい、肥つた、ぞろりと絹物などを着た四十男が前を指して敎へて呉れたので、私はそこに入つて行つた。それは田舍によく見るわびしい中食宿であつた。釜からは湯氣があがつてゐた。私は其處で、子供を二人つれた百姓と、里歸りの若い上さんと一緒に中食をすました。百姓の爺はひもかわを食ひ、子供は饂飩を食ひ、若い上さんは山盛の飯を食ひ、私は蕎麥を食つた。

離れるにつれて、その太田の金山の段々丘陵の一部になつて行く形が面白かつた。白い華表はいつまでも、つまでも見えてゐた。利根川の畔まで來ても見えてゐた。

西長岡は藪塚驛から丘陵の中に入つて行くやうなところにあつた。つまり金山の山つゝきで、そして、その裏になつてゐるやうな位置である。平常は却々賑かだらうだが、私の行つた時は、五六人しか客はゐないで、三階も二階もがらあきであつた。從つて湯も綺麗であつた。

關東平野に特有な、枯れて葉のガサガサした楢の林が丘の斜坂の到る處にあつて、その下の笹原に殘雪が白く見えてゐた。豪家の塀について上つて行くと、桐畑があつたり、先祖代々の墓地があつたりした。前に展けられた狹い野には、百姓が繩楷子を負ひながら、泥濘を拾ひ拾ひ歩いて來るのが見えた。

私のゐたところは、南に面した三階の暖かい一間であつた。少し

光線が明るすぎたが、それでも心が動搖するやうなことはなかつた。私は其處で老いた婢と、口の端にくさの出來た仕出し屋の女中とを相手にして、いろいろな話をした。女中が湯豆腐鍋だの汁だのを膳に載せて運んで來るのが、通の雪解の泥濘の中にくつきりと見えた。

一つある蓄音機は終日二階の一間にきこえてゐた。始めは客が鳴してゐるのかと思つたが、それは浴客を慰めるために家でわざわざ鳴らさせてゐるのだといふことが段々解つた。奈良丸くづしにかつぽれに軍歌。あれさへなければなどと思つたが、後にはそれにも馴れて、別に氣にもならなくなつた。夕暮になると、その蓄音機がばつたり止んで、今度は宿の向ふの離れから、念佛の鉦の

音につれてさびしい御詠歌が聞え出した。『え、此間、宿の老主人が死にまして、今日で四十九日になりますんで』などと番頭は話した。

ある町の裏通では、殘雪の中に青く見えてゐる鞘豌豆の畑などがあつた。午後の日影は美しくあたりを照した。足駄を穿いた袖口の赤い女などが通つて行つた。

小さな料理店の招牌や、御神燈や、格子戸に雜巾をかけてゐる女や、鰻屋の上さんや、軒に吊されたしのぶや、藪ひかぶさるやうに行手に高く立つてゐる二階家や、さういふ晝過の靜かな空氣の中で、三味線を浚ふ音がをり〳〵聞えた。清元らしかつた。

『昨夜はえらい騷ぎだッたね。』

『何うも御氣の毒さまでした。町の人が騷いでしやうがないんですもの。』

『でも、始めの中は寢られなくつて困つたけれど、後には面白くなつて聞いてゐたよ。君なんかも、顏に似合はないいろんなことを言つたね。びつくりした位だッたよ。始めから、ちやんとお浚ひをして見やうか。皆な覺えてゐるよ。』

かう言はれると、女中は流石にきまりがわるいやうな顏をして、

『だッて、あれでなくつちや田舍では間に合はないんですもの。』

藝者は一人きやゐないんだもの。』

『ひとり、えらく管を巻く奴があつたね。』

『え、あれは、町でも評判のわるい人なんですもの。』

『いろんな人があたね。皆な町の有力者だね。町長を攻撃してゐたね。一體、幾人あたんだえ？』

『六人。』

『もつとあたやうだがな。棚の達摩さんを躍つた人があつたね。その時、君は「やア逸見さんのうまいこと、こんなに藝人だとは思はなかつた」ッて言つたね。』

『……』

『もつと言つて見やうか。皆な、すつかり覺えてゐるんだから……。お客が立つたあとで、あら、もつとあるかと思つたら一本し

きしやないよッて言つてゐた女中があつたね。』

『あれは私ぢやない。松ちやんよ。』

『もつと言つて見やうか。』

『およしなさいよ。』

『面白いもんだな。』こんなことを言つて、私は命じた車の來る間の朝酒を靜かな心持で飲んでゐた。私はこれから利根川に添つた五里の路を東に向つて行かうとしてゐた。今度はひろい平野の方へ出て行かうとしてゐたので雪に背いて、今度はひろい平野の方へ出て行かうとしてゐたのであつた。

やがて車が來た。寒いだらうからと言つて、若い車夫は持つてゐたドテラを私の足のところにかけて呉れた。

町を外れると、左に連る秩父の連山の雪がさやかに朝日に光つて見えた。両神山の姿が中でもことに私の眼を惹いた。襞と襞との間にあの長瀞から大宮の方へ行く路があるのだなどと私は思ひながら絶えず其方の方を見た。車は時には竹藪の陰、時には堤防の上、時には藁家の日當の長い縁側などを掠めて通つて行つた。利根川に注ぐある支流のところでは、兩方からの堤防が暫しの間絶えて、去年の洪水の跡らしい跡がそれと指さゝれた。蘆萩が一面に倒れて、そして白く泥にまみれてゐた。

車夫は東京にゐた時分の話などをした。『田舎は氣樂ですけれども、住むなら矢張東京ですな』かう言つて、脚氣にさへならなければ田舎になど歸るんぢやなかつたなどゝ話した。昨夜泊つた宿

の女中達に關しては、『あれらア、何うせ、町の人の妾か何かになるんですな。あそこにゐて、町に店なんか出して貰つてゐるものも三人や四人はありますよ』などと言つた。

川を挟んで此方と彼方とにある小さな町などを私は想像した。風の寒い町、機の音の絶えず聞える町、種物を賣る赤い暖簾の際立つて眼に立つ町。夜は横町の明るい窓に調子はづれの三味線の音のきこゆる町、さういふ町が其處にも此處にもあつた。そして、かういふ町は、多くは關東平野をめぐる美しい山の雪を背景にしてゐた。

チャンカラ、チャンカラー、さういふ音は今でも私の耳にあつ

た。竹藪の中、林の中、畑の中、その音は到る處で聞えた。梭の手をとゞめて糸の切れたのを結びながら、外を通つて行く車の上の人を見る若い女なども時にはあつた。

私はところ〴〵の町に立つ市を頭に描いた。近在から持つて集つて來る繊物、その中には縞もあれば絣もある。青縞もある。殘雪の泥濘の中をこねかへすやうにして集つて來る車、荷車、朴歯の下駄、草鞋、イタリヤネルの汚れた襟巻！。それも午後からは市場はしんとして、町を歩いてゐる百姓や、田舎娘や、子供達や

——

秩父連山の雪は、一方に比べると、餘程規模が小さいが、それでも光線の變化にはかなりに富んでゐた。

『武甲は見えないね』

『武甲山は東京の方からはよく見えますが、此處からは見えません。』

兩神山は餘程右に偏つて聳えてゐるが、その左に夥しく美しく雪に光る山の連亘が見えた。甲州境の山だといふことは一目にそれとわかる。あの雁坂越などといふ峠は、その中にあるのだと思ふと、何となく私はなつかしい氣がした。

秩父と淺間との間に横はつてゐる山は、御荷鉾山である。その奥に、注意して見ると、信州境の荒船火山の城壁のやうな形をした姿が見える。妙義は低いので、此處等あたりからは、僅かに金

鶏の一部を見ることが出來るばかりである。

榛名の雪を見るには、前橋伊香保間の電車が一番好いが、それでも、其處まで行くと、山が近すぎて、關東平野といふ感じは全く失はれて了つてゐる。利根川にも、もう他の奇がなくなつてゐる。

關東平野と言つても、私はまだ所謂武藏野の冬は知ない。川越、所澤あたりも面白いだらうとは思ふけれど、想像するところに由ると、その正面になる秩父と多摩は、北部に見るやうな美しい雪のかゝやきは持つてゐないに相違ない。淺すぎ、或は近すぎるに相違ない。

私の車は絶えず利根川に添つて進んで行つた。小さな川、痩せこけた榛の林、石橋や土橋、もう少し行くと、あちこちに散らばつた藁屋が見える。

『あゝもう須加だ。』

『そこを通れば、もう新郷はわけはありません。』

果して車夫の言ふ通り、私の昔剛染の松並木が行手にはつきりと見え出して來た。それは故郷から信越線の汽車に行く度に、何遍となく通つた路である。その路を左に行くと、利根の堤防があつて、その下に碧い寒い水が白い殘雪の河原の中に帶のやうに鮮かに流れてゐた。

眞直な街道、田に面したところは乾いて、林の蔭、人家の蔭に

なつてゐるところが泥濘になつてゐるやうな光景に私はよく遥遥した。笹原に殘つた雪も私の興味をそゝるやうに惹いた。

私は一時間ほどして、私の友のゐる寺の大きな門のところに立つてゐた。路がわるいからと言つて、車を街道のところで下りてそして本堂の前の舗石道を歩いた。

『ヤ、もう歸つて來たのか。』

『今朝早く妻沼を立つて來た。』

『妻沼から來たのかえ、まだ十時少しすぎたばかりたよ。』

『關東平野をめぐる山の雪は實に何とも言はれないね。ことに、北が好い。太田、妻沼あたりの線が好い。』

こんなことを言つて、私は冷めたくなつた手を炬燵の櫓に載せ

た。『でも、穩かでよかつた。君の行つた日は寒かつたが、二三日、風もなくつて春のやうだつたからね』友達はかう言つて茶などを淹れて來た。

私達は靜かに話した。この町もこの寺もこの寺の後にある停車場も、矢張、あの美しい山々の雪を背景にしてゐるのであると思ふと、私の興は猶續いた。私と友達とはやがて湯豆腐鍋に使ふための蕗の薹を裏の垣の殘雪の中にさがしに出かけた。

川の印象

境で大利根と小利根とはわかれて行くが、その少し下流にこの

二つの流を連絡させるための小さな運河が堀割られてあつた。その朝の静けさが、いつも私の頭に思ひ出されて来た。低い土手には月見草などが朝霧を帯びて俛首れてゐた。雁木では、女が釜や鍋などを洗つてゐた。

山の奥の奥の文珠岩の乳房から滴り落ちた水が、長い間を流れて瀬となつたり淵となつたりして、段々平野の中に流れ出て来るさまが私の眼の前にあつた。ある舟橋の上からは多は秩父の山の雪が夕日に美しく照りかゝやいて見えた。ある鐵橋の下には、小さな埠頭にペンキ塗の小蒸汽が白い煙を揚げてかゝつてゐた。河港といふものゝ面白さなどを私は想像した。運漕店、旅籠屋、赤い襷をかけた女中、岸に長く出てゐる雁木、汽笛が聞えたので、旅

客は慌てゝあつい飯をふき〳〵食つて勘定もそこ〳〵に岸の方へと出て行くのであつた。私はまたこの川の大きな河口を想像した。上流から中流、下流、上流ばかりで出来たやうな川もあれば、上流の殆どないやうな川もあつた。中流ばかりで終つて了つてゐるやうな川もあつた。しかし、川の趣味の多いのは下流だ。下流の少い川は何うも物足らない。私は寧ろいふ意味で、下流の多い利根川が好きだ。

銚子の愛宕山の巓から見た利根川の河口は、尠くとも私の見た多い川の中では最もすぐれた風景を展開してゐた。ちよつと川とは思はれない。關東平野を長い間流れて來た利根の河口とは思はれない。深く入り込んだ入江ではないかと思はれた。

私の友達は話した。『川の水なんて不思議なもんですな。川があちこちで支流を入れますが、その支流の水が容易に本流に一緒に雜つて了はないものださうですな。私の近所では、眞中を鬼怒川の水が流れてゐると言つて、茶に凝つた人は、わざ〳〵船を出してそれを汲んで來るさうです。え、鬼怒川の水は一番綺麗ださうです。眞中に行くと、はつきり線を成して流れてゐるといふから不思議ぢやありませんか。』

私も不思議な氣がした。私は水海道附近で利根に落ちる鬼怒川の上流を頭に描かずには居られなかつた。宇都宮の先の阿久津は昔の樞要な河港であつた。東北地方から江戸に出て來る人は、長い陸路の難きに艱んで、其處から鬼怒川の水路を利用して、河舟

で水海道に出て、それから大利根を小利根へと出て行くのが例であつた。水海道の一驛はその爲めに榮えた。私は交通の不便な昔の旅客をなつかしく思つた。小をさした武士や、櫓を押してゐる船頭や、岸に並んでゐる船宿や、さういふものが私の眼の前を通つて行つた。過ぎ去つたシーンは全く繪となつて了つてゐた。驟雨に逢つて慌てゝ笘を葺く船や、大

信濃川は利根川と共に舟楫の便の多い川であつた。しかし河口は利根川の河口よりも遙かに風景が劣つてゐた。新潟の萬代橋の上から見たさまは、滾々とはしてゐるが、單純である。日和山から見た眺望も、愛宕山から見た眺望とは比べものにはならないと

私は思つた。

信濃川（千曲川）は上流には何の奇もないやうな川である。蓼科の裾あたりを流れる頃でも、中仙道の驛路を横つてゐるあたりでも、川中島附近から犀川を合せて中野町附近に至る間も、單に平野の間を流れてゐるばかりで他の奇がない。カラアのある河港などは見たくても見られない。しかし飯山から山の中に入つて行くと、稍々雲煙の氣を帶びて來て、中流が上流に逆戻りをしたやうな趣を見せてゐる。この山の中には大きな瀬をなしたところなどがある。それを出ると、越後で、其處に私の好きな小千谷の町があつた。

小千谷の町の末にかゝつてゐる橋の上に、私はある朝立つてゐ

た。町も野も山も皆な眞白な堆雪で埋められてゐた。早立の櫓の鈴の音がチヤラ〳〵聞えた。川はそこではまだ上流の烈しさを失はずに凄じい勢で流れた。舟を流されまいとして船頭達は一生懸命にもやひを杭に繋いた。そこから私は苗場山の眞白な姿を眺めた。

北越線の來迎寺驛あたりから、川は全く下流の趣を持つて來てゐた。長岡から下は純然たる大河である。三條あたりに行くと、殊にそれが大きくなつてゐる。ペンキ塗の汽船も來れば、白帆も通る。笘を葺いた舟も通る。しかし、その流れてゐる地盤が第三紀新層で、陸地の出來たのがごく新しい時代なので、兩岸に丘陵や樹木が少い。丁度濃尾平野を流れてゐる木曾川とやゝ趣を同うし

てゐる。利根の下流のやうに、濃かな影や複雑した光線や動搖した空氣を持つてゐない。乾いてそして露出してゐる。

木曾川の河口はしかし大きい。何だか日本の川ではないやうな氣がする。彌富から桑名に行く間の鐵橋から見た眺望の廣々としてゐるさまは他にはちよつとない。

最上川の水路はやゝ信濃川に似てゐる。中流から矢張山の中に入つて行つてゐる。信濃川よりは規模は小さいが、その小さいのが却つて趣を添へてゐる。

本合海の渡頭の向ふに白い高い崖があつて、松が二三本面白く生えてゐる。そこを渡ると、粟畑などの多い間を路はうね〳〵と

曲つて行つて、鳥海山脈と出羽山塊との交接點である山の中へと段々入つて行く。不意にこの川に特有な蓆帆をあげた船がそこにも此處にも現はれて來る。いかにも靜かな晝といふ感じがする。何だか內地ではなくつて、支那にでも行つてゐるやうな氣がする。それに、その路が最上平野と庄內平野とを連絡する唯一の交通路になつてゐるので、車や旅客が絶えず通つて行く。名所圖繪の中にあるやうな休茶屋などがある。

日本の三急流の中では、この川が一番變化に富んでゐる。富士川や玖磨川のやうに唯山中を流れてゐる川とばかりは言はれないやうなカラアがるあ。その代り、急湍、激湍は富士、玖磨に比べると非常に少い。急流と言ふのは、碁點、隼などゝいふ難場があ

つて、よく舟がそこで顚覆するのでさう呼ばれたのであらうが、何方かと言へば溶々とした水量の多い川である。最後まで上流の素質を失はない富士川などとは餘程趣を異にしてゐる。

川が庄内平野に出やうとする處に、清川の一驛がある。樹の多い嵐氣の多いところで、鮎の旨いのが食へる。古風な親切な旅館の二階からは、機を織つてゐる赤い襷の娘などが見えた。木槿の見事に咲いてゐる垣などが見えた。阿賀川の津川の宿と共に私の忘るゝことの出來ないところだ。

雄物川と能代川、秋田ではこの二つの川が大動脈を成してゐる。雄物川の屈曲したのと、能代川の一直線なのと、共に好對をなし

てゐる。雄物川が上三郡の物資を秋田市に運び出すと共に、能代川が北境の木材を海岸へ運搬する主要路になつてゐるのも、矢張好對である。

能代川には筏が多い。蕭帆が多い。

北上川は面白い川だ。殆ど上流がないと言つても好い。富士川や大井川の下流がないのとまさに正反對の形になつてゐる。

それにまた水源が面白い。他の川はどんな川でも大抵山から湧き出して來るのであるが、この川は小さな池をその水源としてゐる。そしてその池は弓弭の清水と言つて、源頼義が炎天に兵士の渇を憐んで、持佛の觀音を念じて、持つてゐる弓弭で突くと、滾

〳〵として水が溢れ出したといふ傳説を殘してゐる。今でもそこにその持佛を本尊とした觀音堂がある。

北上川――七十里を流れて海に入る北上川は實にそこから出てゐるのであつた。溪流のやうな趣は何處にも持つてゐないで、唯、靜かに緩やかに流れてゐる。盛岡あたりでは、無論盛に舟楫の便が通ずる。一の關のすぐ傍の狐禪寺からは、河口の石の卷港まで、毎日小さな汽船が出て行く。

この川は一度でも丘陵の中に入つたことがない。川口近く志津川町の方へ別れて行つた舊水路はやゝ嵐氣に富んでゐるが、新水路は全く平野の中に流れ落ちてゐる。

「私は旅をする度に、分水嶺といふものに常に多くの興味を感ずる。沿つて來た川が段々細く細くなつて、終には草の中にもかくれて埋れて了ふやうに思はれる。もうなくなつたかと思ふと、まだ何處がで音がしてゐる。さゝやかな音がしてゐるなと思つて、段々峠に登つて行くと、遂には音が聞えなくなる。長い間一緒にやつて來た川だ。こんなことを考へると、私は何となくさびしい氣がして、暫し立つて、來た方を振返つて見る。やがて峠に着く。少し下ると、また水の音がする。前のは段々細くなつて來たのであるが、今度のは、段々太く大きくなつて行く水の音である。一種別な感じがする。その水の音が高く大きくなつて行くにつれて、谷が開けたり、畑が見えたり、村が見えた

りする。綺麗な瀬が開いて見えてゐたりする。

大きいと小さいとの區別はあるが、分水嶺と言ふものは面白いものだ。山の脈が水でちやんとしきられてゐるやうなものである。だから、大きな川は大抵大きな分水嶺を持つてゐる。日本で一番大きい分水嶺は、無論脊梁山脈だが、利根川でも信濃川でも木曾川でも大抵その附近にその水源を持つてゐる。その分水嶺から出て、山脈に突つかゝつて曲つたり何かして、そして低い處へと出て行くのである。

東北や中部地方では、その脊梁山脈が複雑を極め高峻を極めてゐるから、はつきり山と川との區別がわからないが、中國地方に行くと、山勢が次第に陵夷して、全然一直線になつてゐるので、

川といふ川は殆ど皆なその脊梁の山脈中にその水源を持つてゐないものはないといふ形になつてゐる。そして、山陽の川は北から南に流れ、山陰の川は南から北へと流れて行つてゐる。

唯一つこの例に洩れたものがある。それは安藝備後の境から石見に出て行つてゐる江の川である。この川は日本第一の分水嶺なる脊梁山脈を南から北へと破つて行つてゐる。

私はその江川と三次川の會湊點にある三次町に泊つたことがあつた。面白い特色のある町であつた。四面山で、江川はその西の山際に偏つて流れてゐた。橋の下には石見の方へ下つて行く河舟の發着所があつて、笘を葺いた舟が二隻も三隻も其處に繋がれてあつた。『さア、河口までは、今は水が減つてゐるから一日一晩位

かゝる』私が訊くと、かう其處の男は話した。私は何故あの時勇氣を鼓して、その舟で下つて見なかつたか。私は今では後悔してゐる。

其處は霧の深い土地で、毎朝十時頃までは四面咫尺を辨せずといふやうなところであつた。段々晴れて行く霧の中に見えたり隱れたりする川と橋――それが私のその江川に對する唯一の印象であつた。

山の奥の奥、脊梁山脈の重り合つた中に、大きな谷をなして、殆ど人跡の至らない間を、二三十里が間も凄しい勢で流れてゐる大きな川がある。

人跡の至らない間を二三十里、そんな川があるだらうかと誰でも疑はずには居られまい。私も其川のことを思ふと、何とも言はれない一種雄壯な感に撲れるのが常だ。

高い崖と崖・絶壁と絶壁、山と山、その間を或は狹く或は濶く、凄しく流れ落ちてゐるのである。雪消の節などには殆ど巴渦を卷いて流れてゐるといふことである。

地圖をつくるための測量師か、日本アルプスの探檢者ばかりが往々この川の岸に下りて行く。そして、針金の渡しで、辛うじてこの川をわたつて行く。『實際、凄じい谷川ですよ。日本にはまアめづらしい。あんな川は他にありますまい。谷が深くつて、水量か多いんだから、徒渉などはとても出來ません。』そこを越えた人

がさう言つて私に話した。

黒部の谷、雄壮を絶した黒部の谷、かう言つて、日本アルプスの探検者は目を瞬つてその話をする。

丁度越中の立山の後あたりに來て、西から北に曲つて、鐘釣などといふさびしい温泉場を通つて、猫の額のやうな魚津附近の平野に落ちて行くが、淀んで静かに流れるひまもなくすぐ海に入つて行つて了ふ。無論下流のない凄じい烈しい川である。

この黒部川に次いで、會津の只見川が矢張人跡の至らないところを十里近くも流れて行つてゐる。

荒川はその下流が首府の中を横斷してゐるので、一種の特色を

持つてゐる。ロンドンのテームス、パリのセイネほどにはないだらうけれど、平野の中から來て、煤烟の中に埋れて行つてゐるのは同じである。

外國の文人の筆はすぐれてゐる故でもあらうが、パリのセイネなどは隨分人の心を誘ふ川のやうに思はれる。面白いカラアのある川で、わが隅田川などはそれに比べると、殆ど言ふにも足りないやうにすら思はれる。モウパッサンの小説やドオデエの小説などを讀むと、殊にさういふ風な感が多い。

しかしわが隅田川も細かく見て來ると、かなりに面白い川である。ドオデエの作に見るやうな洗濯女こそはゐないけれど、夏の朝などは霧で深く埋められて汀渚もよくわからないやうなことも

ないではない。上つたり下つたりする船、羽搏するやうなけだゝましい音を立てるモオタアボウト、青い白いペンキ塗の色を秋の澄んだ空氣の中に際立せて通つて行く小さな汽船、汽笛の音の凄じく川に鳴りわたる大きな工場、夜業の窓に明るく輝く電燈の灯、時には川の水が目もさめるやうな鮮かな碧に染つて、其上を白い帆が風を孕んで無數に上つて行くといふ光景に邂逅することなどもないではない。秋の初めに河に長く落ちてゐる岸の燈火なども明るい印象を人の心に與へずには置かない。

しかし上流はやゝ落寞としてゐる。千住から上には殆ど見るに足りるやうなシインがない。カラアがない。荒川堤の花などは花と水とが全く互に背いてゐる。

都會の川では、この他に京都の鴨川、大阪の安治川などがある。京都の人は鴨川の水といふことをよく口にする。綺麗な形容詞としてはいつもそれを例に引く。その癖、その川は淺に小さい殆ど言ふにも足りないやうなものである。しかし水は實際綺麗だ。四條の納涼棚などに出かけて行くと、山が近いだけに、東京や大阪の平野では得られない嵐氣に富んでゐる。私は春の初めに、祇園の水樓で、千鳥の鳴聲を聞いたことを未だに忘れることが出來ない。千鳥と言へば、宇治川もまた忘れることが出來ない。

大阪の安治川は混雜と不規律とを示したやうな川である。淀川の閘門が出來てからは、川と言ふよりも、溝とか堀割とかいふ方が好いと思はれる位になつて了つた。

近畿では淀川が一番面白い。琵琶湖から出て人跡の乏しい山中を長い間流れて來るのも特色があれば、山城盆地の路中央に諸水を集めて、其處に巨椋池といふ殘水湖をつくつたのも面白い。宇治の長橋、川に臨んだ旅亭、昔名高い交通路であつた伏見大阪間の三十石舟、枚方の古驛、山崎の古戰場、城壁のやうな男山八幡、やゝ下つては歷代の天皇の狩獵に行幸あらせられた鳥飼野などがその沿岸にある。更に面白いのは、太古は淀川は山城川と言つて、枚方の少し下流の處で海に落ちてゐたことである。江口といふ地方は今でもちやんと殘つてゐる。そして、神武天皇東征の舟師は、實に始めて白肩（枚方）に上陸したといふことである。神武天皇は此處から生駒山脈を越えて大和に入らうとせられたのであ

る。

淀川は琵琶湖を水源にしてゐるので、水の量が多い。これも近畿の諸川の水の少いのに比して、感じの好い一つである。宇治あたりでは、上流と中流とを一所にしたやうな若々しい烈しさがある。橋柱に當る水の勢は大河の趣をも具へてゐる。近畿の多い景勝の中で、特に宇治の好きなのは、實にその川があるからである。

木津川の谷もかなりに雲烟に富んでゐる。笠置山の下あたりの風景の好いのは關西線を通る旅客の皆知つてゐるところであるがその一支流名張川の谷も近畿の山水には多く見られないやうな深さと靜けさとを持つてゐる。其處には例の月の瀨の勝がある。

川の上流の面白味は主として溪山にある。谷にある。激湍にある。朝早く立つて、涼しい風を袖に孕ませて、白い水沫の飛ぶ激湍を下る快味は、夏の旅行中、最も忘るゝことの出來ないものである。天龍、富士、玖磨、保津、阿賀、熊野などが中でも殊にすぐれた風景を持つてゐる。しかし、この舟路も汽車が出來てから非常に衰退して了つた。天龍も、富士も玖磨も皆なさうだ。阿賀川もやがてはさうなつて行くであらう。從つて、かういふ川の持つた河港——利根川などの持つた河港とは丸で趣を異にした河港の衰へて行つて了つたのは遺憾である。今ではもう、下灘船看上灘船といふやうな光景を見ることが出來ない。合歡の花の美しく咲いた河岸の涼しい宿屋を見ることが出來ない。今、取れた鮎を

すぐ料理して食はせて呉れるやうな茶屋を得ることが出來ない。それにかういふ船路は、絶えず船が通つてゐなければ、川筋が違つて、船を行るに危險が多いといふことである。天龍峽あたりまでは飯田から船は出るが、長い間を通して乘らうとすると、困難なところが大變に出來て來たといふことである。玖磨川なども矢張さうである。それに、特別仕立は、非常に賃金が高くなる。段々かういふ激湍を下る興味がなくなつて行くのは此上もない遺憾である。

瀨の多いのは玖磨川だ。唯、山がやゝ開けすぎてゐるのと、樹木の少いのとが缺點である。保津川は京都に近いので、人が多く知つてゐるが、距離が短く、それに矢張山が淺い。富士天龍など

の方がぐつとすぐれてゐる。富士川の南部、萬澤あたりは、溪山殊に色を生じてゐると言つて好い。

河船の通らない程度の激湍にもすぐれた風景が多い。日光の大谷川の谷、鹽原の箒川の谷、鬼怒川の谷――ことにこの鬼怒川の谷の奥の湯澤といふ處には、川に一面湯が噴き出してゐて、それが石灰性を含んでゐるので、穴が次第に隆起して、高さ二三十米になつてゐるものが彼方此方にある。そしてそこから湯が沸き出してゐる。

山國川の谷、多摩川の谷、荒川の谷、木曾川の谷、皆な面白い。荒川の谷は古生層の地盤なので、岩石が著しく他と異つてゐる。板を重ねたやうな形をした岩が多い。例の寶登山の近所には長瀞といふ一奇景があるが、これは紀州の瀞八町を小さく淺くしたやうなもので、感じは乾いてゐるが、都に近いので、鮎狩などに出かけて行く人が多い。伊豆の天城山の麓にある狩野川の谷なども ちよつと面白い。

私はまだ行つて見ないが、上州の赤城山の裏の追貝川の谷は非常にすぐれてゐるといふ話である。

一溪傍古刹、終夜枕邊鳴、曉近山巒起、風聲壓水聲、これは去年日光の寺に寓した時に作つたものであるが、大谷の谷は、霧に、雨に、風に、頗る變化に富んでゐる。凄じい男體おろしが吹きおろして來ると、あの大谷の水聲が全く掩はれて了ふほど山や樹が凄じく鳴り渡るのであつた。

河口の近いのにかゝはらず、中流位の趣しか持つてゐない川を私は日向の大淀川に見た。旅館の納涼臺、涼しい河風の吹いて來る楊の上で、その川に對して私は半日暮した。川では少年達が大勢水泳をしてゐた。川の水は淺く透徹つて見えてゐた。帆が三つも四つも通つてゐた。向ふには清武臺の山が碧い空に捺したやうに聳えて、暑い晝の日影がキラキラと輝きたつてゐた。あたりの色彩がいかにも濃い。いかにも九州の夏の晝といふ氣がした。そのあくる日は、私は深い霧を衝いて、霧島の方へと向つて出かけた。やがて大淀川の渡頭が來た。馭者は馬車を渡船に乘せた。朝霧が川を刷毛で撫でたやうに掠めて行つた。

美濃の土岐川は特色のある川だ。あんな川を他に私は見たことはない。中央線の汽車の線路に沿つてゐるのであるが、いかにも綺麗だ。いかにも美しい。何のことはない土佐派の繪卷でも見てゐるやうだ。

兩岸の山も低い。川の水も淺い。しかも地質の關係で、水がいかにも碧い。群青に紫を加へたやうな綠である。それに岩の白いのがよくそれに映つて見える。土佐の繪によくつかつてある色そのまゝである。飽まで日本畫式である。

さういふ谷が少くとも五六哩はつゞいてゐる。汽車はトンネルを出たり入つたりしてその溪に添つてゐる。面白い形をした橋などがかゝつてゐる。虎溪山の後を通るあたりは特に好い。

私はこの川に似た川をあちこちと探して見た。何處にもない。當然あつて然るべき京都奈良附近にもない。大和川にこれに少し似たところがあるが、到底比べ者にはならない。ふと私は陸中の磐井川にある巖美溪を思ひ出した。無論土岐川の方が上方式だ、閑雅で、優長で、ぐつと立勝つてゐるけれど、それでも感じに何處か似てゐるところがある。規模の大小では巖美溪の方がすぐれてゐるが、岩石と水との調和が到底土岐川には及ばない。繪のやうな谷、實際日本畫のやうな感じのする谷である。

私は上流について既に餘り多くを書いた。しかし川の面白味は、矢張下流にあると私は思ふ。私の川の趣味はいつでも大利根の河船や河港や白帆や、水に臨んだ白亜の家や、土手の上に並んでゐる町や、さういふものに落ちて行つて了ふ。利根川圖志といふ本があるが、あれなどを見ると、昔の人はいかに深く川に親んだかといふことがわかつて、何だかその時分の空氣に浸つて見たいやうな氣がする。私は昔の人達のやつたやうに、河舟を一艘仕立てゝ、三日も四日もかゝつてゆつくり河を下つて見たいと今でも思つてゐる。

忘れられないのは朝だ。土手の草にはまだ露が置いてあつて、月見草が黄く處々に咲いてゐる。大きく孕んだ帆が岸の人家を掩ふやうにして通つて行く。かゝり舟からは、朝炊の煙が斜に靡いてゐる。水面を蔽つた朝靄は次第に晴れて、朝日がキラ〳〵と水にかゝやく。櫓の音が靜かに水を渡つて聞えて來る、私は土手の

上で、よく川の上流と下流とを思つた。

北武藏野

一

折れ曲つた見沼用水の土手の上を私達は歩いた。靜かな日で土手の腹に靡いてゐる薄だの刈萱だのが捺したやうに澄んだ秋の水にその影を蘸してゐる。私達の歩いて行く姿も水底に映つたまゝ動いて行つた。

橋が損じて一ところ繩で結んであるのが見える。『大丈夫かなア

落ちたら大變だな』こんなことを言ひながら私達は辛うじて渡つて行つた。川の向ふにさびしい靜かな寺がある。庭には赤い黃い草花などが澤山に咲いてゐた。客間の裏の庭では、蠑螈師が頻りに大きな冬青の木に鋏を入れてゐた。

寺からは見えないが、その少し向ふにかなり大きな沼があるといふことであつた。雁、鴨、小鳥などが今でも下りて、もう少し經つと、汽車から都の狩獵者が澤山に來るといふ話だ。沼の周圍には、雜木山があり、松林があり、陸稻や甘藷の畑などがあつた。田舍の娘の機を織る音なども聞えた。

其夜はその寺から五六町離れた田舍町の外れにあるやうな寺に泊つた。寺僧は七十近い肥つた人で、長い年月を此處で一緒に老

いたらしい主婦と二人で、寺男も使はずに靜に暮した。『此間、水が出かけたので、慌てゝ疊を擧げて了つたものだから、ひどい處で、申譯がない』などゝ詫びて、豆腐や精進揚で酒を私達に勸めた。成ほど室といふ室は皆な疊が揚げられてある。根太の上に莫座を敷いて、その上に薄い座蒲團が置いてある。それでも家具などはよく整頓してゐて、夜のものは肌觸りがよかつた。大きな古風な蚊帳の釣手はチヤラチヤラ鳴つた。

夜もすがら裏の山にそよぐ風の音は、度々私の夢を覺した。

朝、私は其處にさびた靜かな庭を發見した。苔の蒸した石、葉の半枯れた葡萄棚、水盤の中に植ゑられた大きな蓮の葉、庭と田との間は、低い疎らな檜や杉で劃られてあつて、黄熟した稻の水

田から朝日は一面にその晴れやかな光線を私達のゐる室に漲らした、

『はゝア、此處等は皆な水がかう赤いんですな、澁さなくつては使へないんですな、』かう言つて私は立つて、砂を盛つた大きな赤甕から水のちよぼちよぼ落ちるのを見た。背の低い若い時はさぞ美しかつたであらうと思はれるやうな主婦が客の爲めに抓み鹽を小皿に入れて來たり、水を桶に汲んで呉れたりする間、肥つた主僧は、裏の小池に行つて、『赤くない人參ツてめづらしいな』などゝ笑ひながら頻りに野菜を洗つてゐた。裏の山には赤い實の鈴生になつた木などがあつた。梅干を三角にして小箸の先につけた茶湯が先づさきに出されて、つゐ

て茶が出で、それから酒が出た。

老僧は盃を客にさしながら、遠い昔の話などをした。雲水時代の話、旅籠賃が二百文であつた時分の話、東海道中仙道の賑かな光景、つゞいて大宮と上尾との間にある天神橋の話などが出た。

私は靜かな氣分に浸されずには居られなかつた。世の變遷を餘所に靜かに平野の中に老いて行つた人達の生活を考へずには居られなかつた。

二

友達にわかれて、私はひとり車で其處を立つた。私は騎西、菖蒲、原市の線に出て行かうとした。右と左との汽車の線路に挾まれた

ため、全く交通の便から閑却されて了つてゐるやうな驛路——其處に私は昔の北武藏野の面影を得たいと思つた。

武藏野は嚴密な意味で言へば、荒川を境として、その南と西とを意味してゐた。北武藏野はむしろ武藏野と言ふよりも關東平野といふ大きな範圍に屬すべきものである。しかし道興准后の廻國雜記を見ると、この方面も矢張武藏野に入れてある。村君を通つて利根川を渡つて行つた記事などもある。引又、宗岡の線から、川口、岩槻の方へ出て行つた形なども面白い。それに、この平野を橫流した利根と荒川との複雜した關係も面白い。で、私はその方面をずつと原市まで出て行つて見やうと心懸けた。

この間は、戰國時代にあつては、或は上杉に屬し、古河公方に

屬し、少し後れては、北條に屬したやうな土地の豪族の住んでゐたところだ。久喜にもその址があれば、菖蒲にもその址がある。行田の成田は、中でも最も勢力があつたものゝ一つである。かういふ人達が時の中に亡びて行つて、そして唯その城址と菩提所と寺とを殘して行つた形なぞにも深い意義がある。こんなことを思ふ間に、車は加須に行く街道を左に折れて、段々騎西の方へと向つた。

さびしい街道だ。壁の落ちた百姓家と、甘藷畑と、雜木林と、古い小さいお宮と、農具や乾物類を賣る町と、機を織る音と、それより他には何も無い。子供や旅人の買つて食ふものには、ふかした芋と駄菓子とがある位なもので、滿足に中食をするやうな店

すら四邊には見當らなかつた。

日は麗かに上からさした。森の所在はいつも村の所在を示した。村には屹度寺があり宮があり小學校があつた。小學校の周圍は、大抵灌木の林で蔽はれて、そこから咿唔の聲が賑かに洩れて聞えた。ある古い壁には、一月前ほどの近所の町の田舍芝居のビラが半ば破れて貼られてあつた。木槿の咲いてゐる垣などもあつた。

見沼用水を幹線にして、其處此處から引いた用水の溝が到るところに見えた。この幾條の溝——これが昔雜木山であり草叢であり荒蕪地であつた平野をかうした見事の水田や畠にしたことなどを私は頭に繰返した。武藏野に比べて水田の多いのは全くこの用水のお蔭であつた。私は此前武藏野に行つた時のことを考へた。

野火止から平林寺、新河岸から中福を通つて堀兼に行く途中、さういふ間の地形と此處との間を引較べて考へた。其方に比べると、此方は明るくつて、そしてひらけてゐた。農夫の顔にも生々とした色が現はれてゐた。武藏野の百姓に比べては、此方の方が餘程生活も豊であるのを私は見た。

騎西は平野の中にあるさびしい田舍町であつた。町の外觀も羽生、加須に比べてはさびしく、概して交通線路から外れた衰頽と寂寥とを持つてゐた。町の外れでは、若い男がメリヤスなどをひろげて賣つてゐる周圍に、人達が澤山たかつてそれを買つてゐた。

關東平野では、此處等が一番山に遠いところであらうなどと私は思つた。中でも秩父が一番近いけれど、それでも、堀兼、平林寺あたりから比べると、感じが餘程遠いやうな氣がする。全く林の私語と、森の濃い蔭と、水田と溝とに占領されたやうな處だ。『これでも、昔は中々人通りのあつたところです。何しろ中仙道の裏街道ですから』などと車夫は走りながら話した。

三

利根と荒川とが一番變遷の多かつた川であつた。昔は今の合川の線を利根が流れ、荒川は熊谷の北を掠めて、入間川に合し、そして利根に落ちてゐた。今の利根川の流域は、昔は渡良瀬川の流域で、その流も細く、水量も少さく、ずつと栗橋から關宿に行つて、

今の江戸川に落ちてゐた。

合川は丁度見沼用水の北を略々平行して流れてゐた。今では小さな川である。ところどころに土橋が架つてゐたり、藤棚のある茶店が出來てゐたり、浮いた藻に白い花が咲いたり、此方の町から向ふの町に通じた街道を自轉車が走つたりした。川には魚といふ魚は住んでゐない。鯰どさいが少しばかりゐる位のものであつた。

私はこの川が利根の本流であつた時分のことをよく想像した。利根は川俣から折れて、羽生の傍の岩瀬を通つてそして此方へと流れ落ちてゐたのであつた。歷史にある岩瀬の渡なぞといふ渡津は、今はもう跡方もなくなつて、何處だかわからなくなつて了つ

てゐるが、それでも、昔の人達が、ひろい武藏野を横斷して來て、遙かに野州の安蘇の連山を望みながら、そのさびしい渡津をわたつて行つたさまが歷々と眼に見えるやうな氣がした。その殘水路のところどころには、松林などがあつて、砂礫の多い地面などがをり〳〵探り出された。桑畑の中を通つて行く折れ曲つた路、そこを向ふに行くと、小さな赤い稻荷の社などがあつて、殘水路の又殘水路である小さな池には、蘆萩が少しばかり茂つてゐる。夏は剖葦がきまつてやつて來ては鳴いた。

昔の土手の跡のやうなところもをり〳〵殘つてゐた。そしてそこを下りて行くと、確に昔の流域であつたらしい低い桑畑がつゞいてゐて、その向ふに細い合川の水がさびしく錆びて流れてゐた。

一本橋がかゝつてゐたりした。ある時、私が其處を通らうとすると、人はゐなくつて茶褐と長い釣竿とがその一本橋の上に置いてあつた。茶褐の中には大きな鯰だの、大きな鮒などがゴチヤゴチヤ入つてゐた。

菖蒲の町に入らうとするところで、私は昨日わかれた見沼用水に再び邂逅した。矢張、靜かな川であつた。堤防以外に兩岸には何もなかつた。影を薦す薄もなければ、岸を取巻いた林もなかつた。唯、靜かに錆びて淀んで流れて行くのを私は見た。『え、え、これでも洪水がありますとも、……。二三年前には、菖蒲の町がすつかり浸つて了つたんですから』かう車夫は私に話した。

その時は合川から見沼用水も皆一つになつて、昔の利根川の原形

を再現したやうな形を見せたのであつた。私は土手から次第に菖蒲の町へと入つて行つた。町は騎西に比べては、やや大きく、田舍町らしい特色も目に立つて見えた。兩方の交通線路に押された乍ら、靜かに獨立した繁華を維持してゐるやうな感じが私の心と目とを新たにした。

その町では、車の繼かへを待つ間、ある家に行つて晝飯を食つた。それは家の奥にポンプ仕かけの井戸があつて、赤い襷を十文字に綾取つた女達が、何杯となく大きなバケツに水を汲んでゐるやうな家で、私の坐つた一間からは、さびしい荒れた庭が眺められた。私は何年にもかういふ田舍の飮食店を見たことがなかつた。停車場のある町などにはついぞ發見することが出來なかつた昔の

田舎町の飲食店であつた。

私は鮪のつけ焼と玉子焼きで午飯をしました。

私はまた車で出かけた。こゝから原市までは三里ある。しかし、この間の道路は、里人の他は滅多に旅客の入つて行かないやうなところで、車夫も、『原市とはめづらしいお客さまだ。そこにはもう何年も行つたことはないさ』などと言つた。原市といふ町は、汽車と汽車との線路に挟まれながら、それとは何等の關係もなしに、昔の面影と昔の狀態とを保留してゐるやうな町であつた。

菖蒲の町を出ると、道は長く見沼用水の土手の上を東へ向つて走つて行つてゐるのを私は見た。町外れの橋の袂には、大きな柳が一本風に靡いて、三味線の音が靜かにきこえた。川に臨んだ小

さな雁木の上では、赤い襷の女が頻りに物を洗つてゐた。

縱橫に水田に利用された用水の樋のさまが行く行く私の前に現はれた。溝は幾段にも堀られ、樋は幾段にもかけられた。堰いたために、水がすつかり涸れて、水底に舟が膠されてゐるのなども見えた。少し行くと、右に靜かな川が流れてゐるのが見えた。

『あれが元荒川でさ』

かう車夫は私に言つた。

矢張錆びた色をしたどんよりと淀んだ川であつた。老衰した川といふ心持が私の心に滲み込んだ『はゝア、これが元の荒川の水路かな。これが大宮の向ふの方に流れて行つて、入間川に注いで、それで亦元の利根川に川口の下あたりで合して、そして隅田川と

なつて行つたのかな』かう思ふと、德川幕府が治水の爲めに、關東平野の水を左へ左へと骨折つて押てやつた形がそれと眼の前に浮んで來るやうな氣がした。續いて、武藏野の溝渠が地盤が高かつたがために、この地方のやうな完全な効果を擧げることが出來ず、土地が今だに荒蕪に歸してゐるのを私は考へずにはゐられなかつた。玉川上水の水を引いて、武藏野の中部を横斷させて、平林寺から志木の方へ導いて行つてゐる溝渠のさまなども私の頭に浮んだ。

元荒川に邂逅したところから少し行くと、柴山に言ふ村があつて、此處で見沼用水が元荒川に合してゐるのを私は見た。衰へた川同士が、何の感興もなく、何の興奮もなくどんより寄つて來て、

どんよりと相合して、そして田圃の間に流れて行つてゐるさまを私は不思議な心持を以て見た。

柴山といふ村は、丁度この二川の會點に面して、やゝ賑やかな田舍の町を展いて見せたやうな形になつてゐた。赤ちやけた瓦、赤い甍、たばこといふ赤い看板などが、さびしい、くすんだ錆びた色の中に浮出して見えてゐた。橋に面したある茶店の前を通る時には、其處にやすんで中食をしてゐる田舍の爺さんと娘との姿が見えた。

一步一步、道は狹く、畠は少く、あたりがさびしくなつて行くのを私は見遁さなかつた。『こゝからは、原市街道です。これまでは中仙道の裏道で人通りがありますけども、これから先は、もう

誰も通りこはないやうなところです』などと言つた分岐點から段々入つて行くと、成ほどこれはさびしい。東京近いところに、それも右にも左にも、三十町内外で汽車の停車場を持つてゐるところに、かうしたさびしい處があるかと思はれるやうな光景が次第は現はれ出して來た。私の車は時には川の縁、時には甘藷畠の傍、時には日影の濃淡のチラチラする林の傍を縫つて靜かに動いて行つた。今までいつも眼を離れなかつた百姓家の影はすつかりあたりに絶えて林と丘と畠とばかりが續いた。水田はもうあとにあとになつて了つた。私は開けた關東平野からさびしい武藏野へと入つて行つたのだ。

四

武藏野は今二條の鐵道が横貫した。

私は二月三月、この鐵道に添つて、彼方此方と歩き廻つたことを頭に繰返した。今で昔の武藏野の面影の殘つてゐるところは、所澤以北乃至以西であらう。それから、この二條の汽車の並行した中間に位するあたりのある部分であらう。一度は私は東上線の膝折驛で下りて、川越街道の野火止から平林寺へと行き、そこから引返して志木（昔の引又）に來て泊つた。平林寺は好い靜かな寺だ。そこから雜木山越しに、野火止に近道をして出て來るあたりも好かつた。玉川上水を引いた綺麗な溝渠に添つて、ひろい道をひろい野を、夕暮の金色の光に浴しながら、明るい灯の志木町に

近づいて行く心持も忘れられなかつた。志木町は一見見て古い町だといふことが飲み込めた。昔の奥州街道――義經が通つたり道興准后が通つたりした最古の奥州街道は、久米川から内川に添つて此處に來て、宗岡を通つて、そして荒川を渡つて岩槻の方へ出て行つたのだ。私は其處に泊つたあくる朝、早くひとりでその町を歩いて見た。町は少し行くと、やゝ低くなつて、對岸の宗岡との間に、美しく内川の水が流れてゐた。橋がかかつてゐた。

一度は東上線の新河岸驛から下りて、川越街道を横ぎつて中福を通つて、堀兼へと志した。例の名高い堀兼の井を見やうとしたのであつた。武藏野の中で、恐らく此附近ほど昔の面影を殘してゐるものは、あるまいと私には思はれた。あたりは林と畠とばかりである。甘藷と陸稻と茶畑とかばりである。村は勿論、農家の煙さへ滅多には見えない。堀兼の井のあるあたりは中でも殊に私の興味を惹いた。

一度は川越線の東村山驛で下りて、その近くにある元弘戰死者の碑を訪ねた。碑のある德藏寺の廢園は、頗る詩趣に富んでゐた。それから私は久米川の橋を訪れたり、義貞時代の塹壕の跡を模索したりして、小手指原の方へ行つた。

小手指原と相對して、狹山の丘陵が長く靡いてゐた。此處等に來ると武藏野といふ感じも、東京の郊外附近で味つた武藏野とは違つて、背景も大きければ、氣象も雄大であつた。武藏野は、地理學上、高原的臺地であるといふことであるが、此處等に來ると、

成ほどさうだと點頭かれる。そして、武藏野鐵道の車窓は、優にこのひろい風景を展望させるに適してゐる。狹山の丘陵の中にある山口觀音、北野天神などといふところも、武藏野研究者は是非行つて見なければならない。

飯能は山裾の町だ。宿屋の二階から、町の屋根を隔て、秩父丘陵の長く關東平野に突出してゐる形を見るのは、ちよつと他には見られない光景の一つだ。扇町屋の平地から武甲山を松原越しに發見したさまも、私の忘るゝことの出來ないものであつた。

私は人々に話した。『武藏野は實際不思議だ。東京のやうな繁華な首府をすぐわきにひかへて居りながら、一里二里、三里入ると、もうすつかり田舍だ。殆ど東京がその近くにあるとは思はれない

ほど田舍だ。何等東京風の影響もなければ、首府からの交渉もない。民は皆な畠を耕して甘藷などを常食としてゐる。交通の便がなかつた故もあるかも知れないが兎に角不思議だ』

それほど武藏野は今でもさびしい。東京から武藏野を見に行くといふ人達も、多くは電車の線を利用して一歩も其先に行つて見やうとはしない。從つて、武藏野の眞相は、今だに都の人達に知られずにある。

こんなことを私は車の上で考へた。そしてこの原市附近が矢張その昔の武藏野の面影を多く殘してゐることを想像した。林には林が續いた。

やがてひろびろとした處へと出た。振返ると、村の所在を示し

た森の上にぱつと白い烟の靡つてゐるのが見えた。

『何處だえ、あれは』

『桶川でせう』

『停車場かね』

『さうでせう』

五

そこまで直徑にして一里に足らなかつた。左は、東北線の線路が矢張一里に足らないところを走つてゐた。

白岡の八幡宮の話などを車夫はした。そこまでは此處から一里位しかないといふことであつた。

林をいくつか過ぎた。やがて廣い一條の道は、さびしい原市の町へと私をつれて行つた。長い庇、さびしい通、壞れかけた家屋、街道に干した穀物の莚——北武藏野の一角に來たといふやうなさびしい心持は新しく私の心を襲つて來た。

少くとも街道筋には見たくとも見ることの出來ないやうな特色ある古い町であつた。附近に比較を求むれば、その感じはいくらか岩槻の町に似てゐた。遠い昔の面影と、遠い昔の空氣とは、何處となくあたりに巴渦を卷いて、旅客のなつかしさを誘ふやうに見えた。私は町の入口で車を捨てゝ、靜かにその空氣に浸るやうにして歩いた。衰へたもの、頽敗したものゝなつかしさよ。いくらか地盤が高くなつてゐるので、町は秋の空氣の中に浮彫

のやうに浮き上つてゐるのを私は感じた。歩いて行く通には、物音もなければ、人の影もない。しんとした静かな午後の空氣がしめやかにあたりを領した。

長い庇の奥に破れた障子の高窓があり、すつかり閉め切つた二階があり、板葺の古くなつた屋根があつた。そしてこの衰頽と滅亡の中に、ある期間は鮮かに人目を聳だゝしめたであらうと思はれる醫師のペンキ塗の剝げた洋館の雜つてゐるのなども面白かつた。町のところ〴〵には楊柳が栽えられてあつて、その葉は疎らな影をさびしく街上に落してゐた。

この町にも旅館はあつた。かういふ町のかういふ旅館にはさぞさびしい物語の種が潜んでゐることであらう。日本のルージンが

其處等に彷徨つてゐることであらう。こんなことを考へながら私は歩いた。靜かに、靜かに……。

しかしこのさびしい昔の町も時の間に盡きた。私に、東北線の停車場に行く道を敎へて呉れた人は、髮の長く生えた大きな瘤のある中年のさびしい顏をした男であつた。

町を曲つた角で、私は敷島を買ふためにある店に寄つた。そこは飮食店で、奥には大勢人が集つて、赤い襷をかけた女が頻りに何か饒舌つて笑つてゐた。その笑聲にも衰頽と寂寥とが名殘なく附纏つてゐるやうに私には思はれた。

やがて私は廣い明るい野に出た。一條の大路は、斜坂になつた扁平い丘を眞直に向について行つてゐた。秋風はさびしく路傍の

薄を吹揺がした。到る處林は日影に透かされ、丘は影に霞はれ、遠い天は色ある雲に彩られた。停車場から來たのであらう。自轉車が一輛、滑かな路を勢込んで走つて來たが、やがて私の歩いてゐる傍を掠めて、飛ぶやうにして通つて行つた。

長い岡が盡きると、水田がその前にあらはれて來た。水草の深く茂つた中に、めだかの泳いでゐる川なども見えた。岩槻の方へ行く路は、赤い坂になつた路で、そこからその路は汽車の線路を横ぎつて、林や野を通つてそして向ふに行くのであつた。私は四五年前に行つた岩槻の町を想像しながら歩いた。庇の長いさびしい古い町が私の眼の前にあつた。

『蓮田に行くのは、これで好いんですか』

かう私は路傍のある農家で訊いた。路はまた丘から丘へとかうつゝあつた。丘の上からは、天末がひろく開けて望まれた。

やがて今まで——菖蒲を出てから殆ど見たことのないやうな人家の集落が路の行先に現はれて來た。ある農家では、大きな精米所を自分の庭に仕かけて、烟筒から烟を漲らせて盛に米をついてゐるのが通りから見られた。豪農らしい門構の家や、柘榴の見事に熟してゐる庭や、さういふものがそれからそれへと續いた。

停車場の近いのがわかつた。それは何遍通つたか知れないそしてまだ一度も下りて見たことのない停車場であつた。私は先づ停車場へ行つた。

まだかなりに長く待たなければならなかつた。仕方がないので

私はその前にある旅館へと行つた。そして金魚などの泳いでゐる小さな池に面した靜かな室で、若い岩槻生れの女と一時間ほど話した。『さうですね、此處の停車場は、滅多に下りる人などは御座いませんね。汽車が大抵は素通をして行つて了ふんですもの……。本當ですとも、貴方のやうなお客樣でもなければ、東京の方は滅多に此處にお出にはなりやしません』

女は岩槻の話を何彼としたが。私の知つてゐる旅館が改築されたことや、町が昔から比べるといくらか賑やかになつたことや、その女の親しい友達がある豪家の息子と情死した話などを盡きずにした。室には明るい午後の日影が一杯にさし込んでゐた。

扉に向つた心

書といふものは、年齡や境遇で讀まなければならないやうなものだ。幾度讀んでも面白くなくつて、途中で止めて了つた書が、年齡や境遇で始めて生々とした印象を與へて來るやうなことはよくある。

一作家の一生かゝつて書いた全集は、讀者も一生かかつて讀まなければわからないものだといふことを此頃殊に深く思つた。

私はこの山の中の僧房に、いろ〳〵な書を持つて來た。フロオ

ベルの全集、それはすつかりその評傳を書かうと思つてゐるので一通り讀んで見やうと思つて持つて來た。殊に歷史物を讀んで見やうと思つた。そして最初に『セント、アントニオの誘惑』といふのを讀んだ。次に、もう一度『感情敎育』を讀まうと思つてその長い〳〵小說をくり返し始めた。

ところが、それをまだ少ししか繰返さない中に、ふと J. K. Huysmans の "En Route." をひらいて見た。これは、これまでに も何遍となく讀みかけてはよして了つたものである。何うもわからない、何うもその心持がわからない……。かう思つて私はいつしかその黃い表紙の本を伏せた。頁も半分位しか切つてない。

ふと私は思つた、Huysmans はナチユラリズムからミスチシズム

に移つて行つた人である。『廣く淺く掘るよりも狹くとも深く掘らなければならない。』と言つて、そしてナチユラリズムから出て行つた人である。それに、此作者ほど忌憚なき筆を以て世間の惡德を描いたものはないと聞てゐる。ゾラにはまだロマンチックなところがある。ある目的の爲めにする誇張を敢てしたやうな缺點がある。ドストイエフスキーには小さな同情がある。作者が作中の人物と一緒に泣いたり笑つたりしてゐる。共に主觀的なところがある。ところが、このHuyemans になると、些の作者の同情が加はつてゐない。あるがまゝに書いてある。どんな殘酷なことでも、どんな陋劣なことでも、作者はそれに感傷したり激昂したりしないで平氣で書いてゐる。かう何かの評論で見たのを私は覺えてゐる。

それに、この Huysmans といふ人は、その一生の閲歴から言つても、非常に辛い苦しい複雑した生活を經て來た人だ。現代のデカタン風な生活の中を、眞面目な心を抱いて、沈んだり、浮上つたりしてやつて來た人だ。『Marthe』といふ小説などは巴里の市井のことを書いて、その描寫が骨に徹してゐるといふことである。私はその人の書いた心持が解らない筈はないと思つて讀み始めた。『兎に角、終まで讀んで見やう。何んなに面白くなくつても、何んなに解らなくつても……』から思つて私は一頁々々と繰つて行つた。

中世紀の寺の感じを書いてゐるのを面白いと思つて讀んでゐる

中に、私の心は忽ちその Durtal の心持になつてゐるのを發見した。Durtal は四十をもう越えてゐると書いてある。人生の峠を越えて了つた人である。その人の性慾や快樂や放蕩や疑惑や煩悶やさういふものを背景にして、そしてその心持が肉體から精神に向つて走つてゐる形を書いてるのがこの作である。ナチユラリズムからミスチシズムに入つて行つた作者その人の心持がこの作を生み出してゐるのである。

フロオベルのセント・ジユリアンの話とヘロの『Physionomies De Saints.』とを比べて、前者は藝術的技巧乃至藝術的精神に於ては殆どその完きを盡してゐるが、全體に於て人間に最も必要なものが缺けてゐるやうな氣がする。それは何であるか。信仰であ

る。信仰の缺乏である。それに反して後者は熱烈なる心持を抱いてゐるが——それがあるが爲めにその書は多くの價値を存してゐるのであるが、一方に藝術的精神といふものが全く缺けてゐるが爲めに矢張十分の効果を收めてゐない。此の二つの缺點の間に煩悶してゐる Durtal の心は即ち作者その人の心ではないか。

藝術を押つめて行つて壁にのみ向ふやうな心と信仰に信仰を進めて珠數をつまさぐるやうになる心との間に横つてゐる苦しい疑惑、それに肉體の誘惑から來る恐ろしい聲、頭も割れるやうな又はすつかり破産して了つたやうな現代的苦悶、それをこの書は極めて内面的にしかも描寫的に描いてゐる。

巴里の寺院——通俗なやかましい寺院に堪へかねて、つとめて靜かな St. Severin のやうな寺をたづねて、中世紀のミスチシズムの匂ひを嗅がうとする心持のかげには、大きなナチユラリズムの破産と言つたやうなものが隱れてゐるではないか。

四十になつても、矢張一番恐ろしいのは "The Sin of Flesh" である。Madame Chantelouve といふ女は何んな女であるか、また Florence と單に作者が書いてゐる女は何んな女であるか、男の耳をかむ癖のある女とは何んな女であるか、馬鹿のやうな獸のやうな女であるか。

作者はさういふ背景にゐる女のことは少しも書いてゐない、そ

して唯さういふ女から離れる苦心と苦悶とをのみ書いてゐる。しかし、何うしてもそれが絡みついて來る、纏りついて來る、行つて逢はなければ何うしてもゐられないやうな心持が續く。殊に夜が堪へられない。Durtal が Abbé Gevresin に『しかし巴里の寺院は、私のやうな A Sinner に取つて最も必要な夜中に大抵閉ぢられて了つてゐるではありませんか。』と言つてゐる。仕方がないので、夜中に起きて、暗い町を選んで歩いて行くところなどもある。

Joys of life をつきつめて行つて、そしてゆくりなく邂逅した苦悶である。

生活に向つて突進して行く中は好い。張り詰めた心持を抱いて戰鬪と勞働とに携つてゐる中は好い。藝術と生活とを單に一緒にして、そしてそれで滿足してゐられる中は好い。しかし、それに突當ることはないだらうか。何うにもかうにもすることの出來ないやうな時は來ないだらうか。

最も善いもの、最も完いものと信じた自己の生活が、一農夫、一勞働者、Trappist にも及ばないといふことを感ずる時が來ないだらうか。來ない人は好い。來ない人には問題はない。しかし、私の考では、Durtal の考では、人間は必ず一度はさういふ窪に陷るものである。

Durtal が La Trappe の寺院に赴く條は殊に精彩を極めてゐる。

重い患者が――巴里にゐては何うしても治らないやうな重い患者が病院に入院してその痛いところを切開して貰ふやうに、かれはその遠い田舎の谷合の古い中世紀の寺院へと入つて行つた。

巴里から半日ほど汽車に乗つて、そしてそこからまた五六時間馬車に乗つて、かれはその谷合の周圍に塀を取廻した古い寺院へと入つて行つた。恐怖と不安と期待と絶望との渦の中に漂ひながら……。

そこには何ういふ世界がひらけて居たか、何ういふ世離れた氣分が漂つてゐたか。巴里の一享樂者は、其處に、朝二時に起きて五時に禮拜祈禱をして、十一時半に午飯を食つて、六時に夕飯をすまして、八時に寢るといふ單調でそして寂寞を極めた生活を見たのである。互に口を開くことを禁じ、互に友情をつゝけることを禁じ、唯、禮拜して、勞働して、そして一生を送るといふ世界ぶつた人の行列を何とも言へない心持を以て見たのである。

其處では時代もなければ、歷史もない。唯あるのは神ばかりである。そこにゐる同胞の中には、自分が今何ういふ世の中に生れてゐるか、何ういふものが世の中にあるか、何ういふ思想があるか、何ういふ悲劇があるか。『女が何うつくられてあるか』をさへ知らない人達がゐるのである。そして、死は神に近づく階段とし て、唯、喜悦の情を以て迎へられてゐるのである。白い衣を着たまゝ、頭巾をかぶつたまゝ、棺にも入れず、死んで土に埋められ

て行くのである。そして中世紀から今日に至るまで、その生活はさびしくつゞいて來てゐるのである。巴里の享樂者の送つた生活に比べて何といふ對照だらう。

Durtal は池に臨んで腰をかけて、そして水を見てゐる。樹の影や雲の姿などをしづかにうつしてゐる水を見てゐる。『この水が即ちライフだ。流れて瀧津瀬のやうになつては、何等の影をも映すことが出來ない。唯、碎けて流れて行くばかりだ。かういふ風に靜かに落附いた堪へた心でなければ深く入ることが出來ない』などゝ言つてゐる。

僧房の中でも、Durtal は矢張その Florence を思ひ出してゐた。

それが時々恐ろしい嵐のやうにかれを襲つて來た。すぐそこに來て笑つてゐる。不思議なワイルドな笑ひ方をしてかれを見詰めてゐる。かまれた耳の微かな痛みをかれは感じてゐる。

『何と思つてゐるだらう、不思議に思つてゐるだらう。』

こんなことをかれはいつか考へてゐる。

かれは眠られない夜を幾夜か送つた。惡夢に襲はれて飛び起きたやうなことも幾度もある。暗い影の襲つて來るのに堪へかねて主僧にその救けを求めるところなどもある。

私は Huysmans のすぐれたサイコロジストであることを、此の作に由つて知ることが出來た。內面の描寫、心理の描寫——それが何ういふ風に有效に連ばれてゐるかといふことをも考へて見た。

四百頁近い大冊は唯 Durtal の獨語と獨想とから成り立つてゐると言つても好い位である。

四十を越した主人公の心持が私にはよくわかる。四五年前に二度も三度も讀んで見ても、何うしてもわからなかつた心が、今になつて始めてわかつて來る。

人間には轉換期といふものがあるやうに私には思はれる。厄年などゝ言つて昔の人はそれを非常に恐れてゐるが、その厄年が即ち人間の心の轉換期ではないだらうか。その時分にならなければその時分の心は人間には完全にはわからないものではないだらうか。

A Trappist ―さういふ心持はさびしい悲しいしかし免れ難いものである。人間の必ず一度は突當らなければならない心持である。それは人の性質や境遇に依つて、いろ〳〵變つた『表現』をするであらうが、しかし、Durtal の「表現」の心は四十を越した人の心であるといふことだけは爭はれないと私は思つてゐる。

夕方など私は僧房からよく散歩に出かけて行く。靜かな、しんとした、杉の大きな木の眞直に立つた廣い道を私は靜かに歩いて行く。もうその頃には、其處には誰も通つてゐない、參詣者も四時限りばつたりと跡を絶つてゐる。

大きな堂がある。そこには三尊佛が安置されてある。此處の寺の金堂である。そこを私は靜かに歩いて行く、古い大きな扉がぴ

つしやりと堅く閉つて、しんとしてゐる。何の物音も聞えない。唯、私の心がその大きな閉つた扉に向つて波立ちつゝあるばかりである。Durtal の心のやうに、ナチユラリズムからミスチスシズムに入つて行つた J. K. Huysmans の心のやうに……。

ある友に寄する手紙

——君

君も私も好きな初冬がまたやつて來ました。久し振に此頃の私の近況をお話しするのも興味があることと思ひます。

私は殆ど全く酒を廢しました。今年は夏以來の脚氣が例になく重く、一時は十分に立つて歩くことも出來ない位でしたから、酒の方も自然止すやうな形になつてゐたのですが、今ではそれが習慣になつて、他人が盃を嘲んでゐるのを見ても、別に心を動かすやうなことはなくなつて了ひました。そして、しる粉の一二杯菓子の一箇二箇、さういふものが却つて私の茶の時の伴侶となるのでした。

それに此頃はなるべく訪客を避けて暮して居ります。舊友にも滅多に逢ふ樣な機會は御座いません。をり〳〵小集會のはがきなどが朝の門の郵便箱に入つてゐたりすることがありますけれど、ついぞ一度も出て見ようとは思ひません。孤獨の上に起つて來る快樂、寂寥の上に伴つて來る自由、折角得たさうしたものを破壞

して了ふのを私は恐れて居るのでした。

靜かにして置いて貰ひたい。もう少し考へたり讀んだりしたい。かう思つて最初は私は私の一室に閉籠つたのでしたが、今では十分な孤獨と十分な靜養を得たので、心も氣分も段々落着いて、以前のやうに烈しく躍つたり激したりするやうなことは滅多には御座いません。"A Rebours" の Des Esseintes の生活の中から、デカタンと藝術とをぬきにしたやうな生活を送つてゐると思つて下されば間違ひは御座いません。

私の机の周圍には、隨分いろ〳〵ものが散ばつてをります。人が見たら、その不統一と不整と偏屈と散漫とに驚かずには居られないでせう。『考槃餘事』といふ古〳〵さい本や、『江戸名所圖繪』や

『竹堂遺稿』や、さういふものが一方にあると共に、それに交つて Huysmans や Maupassant や Goncourts などの書があるのです。"Fool in Christ" は二三年以來の私の愛讀書で、殆ど座右から離したことは御座いません。

私は Durtal のことを考へたり Emanual のことを考へたりして日を暮してゐますが、時々私は私の傍にある大きな日記を繙いて見ることがあります。それは維新から維新以後にかけて、生きてゐたある無名の人の長い〳〵日記です。その日記は初めは別に私の興味を惹きもしませんでした。またその日記が何うして私の書齋の中に紛れ込んで來たかも知りませんでした。それが不思議にも、此頃では、非常に大きな Vision となつて、私の眼と私

の心とに映つて來てをります。最近百年間の日本の歴史の上で、この無名の人の生きた時代ほど變遷の烈しかつた、潮流の大きかつた時代はあるまいと私は思つてをります。その變遷とその潮流とについては、私は僅かにその一端を知つてゐるにとゞまつてゐますけれど、それでも私はその日記を透して、凄じく私の胸の轟くのを感ぜずには居られません。其處には複雑した潮流が凄じく渦を巻いてをります。ロオマンスがロオマンスとつゞいて生れて來てをります。ある生活から不意にある生活に墜ちて行つた慌しい光景、沈滯して亡びて腐つて行く人間の靈魂のありさま、さういふものが到る處に見受けられます。しかし私はこれを何うして描き出すか、何うしてこれを完全に紙の上に現はして來るか。と

ても私の力には及ばないやうな心地が致してをります。しかし私はその Vision の日增に大きく新しくなつて來るのを待つてをります。私は何うにかして、これを育て上げなければならない。

——君。

イプセンは『われ等蘇生の日に』と言つた。私も、此頃さういふ反射作用が日夕に私の周圍に起りつゝあるのを感せずには居られません。私の過去は影となつて、絶えず私の周圍から私を威嚇してをります。私の亡靈は絶えず私を苦しめてをります。イプセンは青年に喜ばるべき作家ではない。又、青年に完全に理解さるべき作家ではないと君は曾て言つたが、實際それに相違ありませ

ん。人間の反射作用、それに最も痛切に觸れた作家は、イブセンを除いては外にないかも知れません。

先日、ある若い女が來て、私に言ひました。『この間お書きになつた努力の空しいといふことは一體何ういふことですか。私がかうして先生のところに上る心持とは丸で違つた反對のことのやうに思はれるのですが――』私は老建築師を思ひ出さずには居られませんでした。塔の上から落ちて死ぬ老建築師の運命は、避くべからずに、必然に私達の前に迫つて來てゐるのではありませんか。

しかしイブセンの心境には私は留り得ないもの丶一人です。貴族的な藝術的なあのゴンクールの態度と、スカンデナビアやスラブの作家の心境とそこに踰ゆるべからざる大きな溝があると同じ

やうに私と老建築師との間にも大きな相違があるのではないでせうか。むしろ灰色の冷たい四壁の中に筆を持つたまゝ斃れた作家の態度が一層私に共鳴するのではないでせうか。

われ等蘇生の日に。かう叫ぶよりは、われ等は寧ろ沈默すべきではなからうか。その方が自然で、そして『從順』と『服從』とを持つた偉大なるあるものでのではなからうか。

靜かにしてゐたい。落着いてゐたい。かう私は思つてをります。

――君。

私達は世間に向つて、ひらいた窓を成たけ多く持つてゐなければなりません。しかしその窓は、靜かで、寂寥で、些の雲影もそ

の前を掠めないものでなければなりません。そして私達は世間の煤煙と塵埃とを避けるために、或は世間に漲る凄じい驟雨の餘沫を受けないために、一々その窓を閉めなければなりません。何故かと言へば、私達は窓の中の濡れるのを恐れるからです。窓の中の白紙や卓の汚されるのを恐れるからです。

流石にゴンクールは豪う御座いました。かれは大きなヒエックを持つことを屑としませんでした。又、大きなスケールを持ち出すことを敢てしませんでした。古來の大創作家の持つたVisionさういふものにも捉へられませんでした。煤煙、塵埃、驟雨、さういふものに對して、かれは一々丹念に窓の扉を閉めることを忘れませんでした。スカンデナビアの作家の陷つた反抗、スラブの

作家の持つた苦悶、さういふものに對しても猶且つその靜かな態度を失ふことをしませんでした。そしてその窓の中には、他に見ることの出來ないPure observationを持つてゐました。

——君。

私は私の近況を話す筈でした。思はず話を外の方に持つて行つた私を許して下さい。此頃は朝早く起きて、殘月を樹間に仰ぐのを樂みとしてをります。流るゝやうな月の光、それに雜つた微かな黎明の光、その時分起きて、窓の戸を開くと、何とも言ふことの出來ない好い心持がします。それが私の藝術のシンボルでありたいと思ふほどであります。

私は多く一室の中で日を暮すのを例としてゐます。文展にも唯一度行つたきりです。日本の繪畫界はまだ混沌としてゐます。スケイルとロオマンスと粗雜な空想とがあるばかりで、唯一つの純な觀察をも見ることが出來ませんでした。ある日は、私は郊外に向つて出かけて行きました。ある日は、農夫の大勢畠に出てゐる野を汽車の窓から見て通りました。ある雨の日には、雨漏りの音を氣にしながら、終日ソファの上に横はつてゐました。

私の眼は時には外に向つて開き、時には內に向つて開く。一は人生に對する窓であり、一は空間に對する窓であります。私の內部と空間との一致について私は昨日も今日も考へることが多う御座いました。

時には、私は雜誌などを讀んで見るともないではありません。しかし、日本の今の文壇にも矢張り Pure observation が乏しいと思はずには居られません。ボオドレールから脈を引いた傾向やら、スラブのあら削りの素樸を喜ぶ傾向やら、さういふものがX光線のやうになつて混亂して交り合つては居りますけれど、要するに、話說と空想とロオマンスとの境を脫却しないものが多いやうに私には思はれます。ボオドレールの脈を引いた傾向は、何故もつと極端な尖つた爛れたところまで行かないでせうか。何故空想とロオマンスとの間にたいしてその先に踏み出さうとしないでせうか。スラブの素樸を喜ぶ傾向は何故もつと深い銳い形と心とを取つて來ないでせうか。何も彼も其處にさらけ出して、その純な苦

悶を見せないでせうか。

批評家はスケイルの大きいロオマンスの創造と理想の再設と、さういふものを常に要求してゐますけれど、何故もつと徹底した、純な境を要求しないのでせうか。説話のなまぬるい境に満足してゐるのでせうか。

冷たい空氣、骨に徹するやうな空氣、魂を冷却しなければ止まないやうな空氣。さういふ空氣は何時文壇に漲るやうに流れて來るでせうか。

――君。

君は忘れはしますまい。あの時を。あの山の上の冷かな鮮かな

空氣の身に泌みわたるやうな爽やかな空氣を。

『山の上は丸で空氣が違ひますね。』

あの時、君も私もさう言つて相顧みた。丁度あれは今時分でした。十二月の初めでした。山にはもう雪が白く來てゐました。山の下は小春日和で、紅葉などがまだ谷合に赤く殘つてゐたりしたのに、山の上に來ると、光景はすつかり變つて、木の葉が雨のやうに散つて、冬の日の明るい光線が眩ゆいばかりに荒涼とした野を照した。

其時、私達はさびしい高原の停車場で下りて、迎へに來て呉れた友達と車を並べて、山の雪の日の光る野を横つて、その友達の家へと行つた。

その友達の家は靜かな山懐にあつた。窓からは、日本アルプスの日に光るさまがそれと見えた。あの時の一夜、それを私は忘れることが出來ない。私はその時少しばかりの、酒に醉つて、無遠慮の假寢をして、君や友達や友達の細君に笑はれた。

其時分親んだ作家と作品とは隨分に多かつた。ダンヌンチオもあれば、シエンキウツチもあつた。希臘のビケラスなどといふ作家の短篇などを喜んで讀んだ。しかし、今日まで私の伴侶である作家は幾人あるでせうか。ドオデエも過ぎ去つた。ゾラもすぎ去つた。ダンヌンチオなどは私の伴侶としては、あまり色彩が浮華すぎる。メイテルリンクの自然と運命とは、あまりに心と態度とがわかすぎる。——君不思議ではありませんか、その時分には

何の共鳴を感じなかつた。"A Rebours"の作者などが、却つてそのまことの心を私に示して見せるといふやうになつた。

山の上の冷めたい空氣、慌しい初冬の到來、雪と日との反映、それを私は忘れることが出來ない。君あの時、馬車を一臺借りて停車場から山のスロープに添うた路をある廢驛へと行きましたつけね。あの時の興は遂に〳〵再びやつて來ない。

——君

今夜も靜かに更けて行きました。夜風の落葉を動かす音が忍ぶやうに微かに私の魂をそゝつて行きました。今夜は、これからまだ長く起きてゐて、例の大きな日記をくりかへして讀まうと思

つてゐます。私の傍には、火鉢があり、火があり、茶器があり、菓子がある。周圍には種々なものが亂雜に散ばつて置かれてある。君の書いた本などもある。遠くにゐる君を偲ぶには最もふさはしい夜だ。……

山の寺

山中のうつり變りは實に早い。私の來たのはまだ昨日のやうな氣がしてゐるのに、山はもう色が附き始めてゐる。夜、神橋あたりを散歩すると、もふ冬がすぐ眼の前に迫つてゐるやうな心持がする。

『これで紅葉の時、一寸人が來て、そして、もう冬ごもりですからね。堪りませんよ。』

かう和尚さんは言つた。

日光の水は綺麗だ。そして何處に行つても水が湧き出してゐる。裏店の汚ないところからも湧き出してゐる。そして、雲が映つたり、樹の影が映つたりしてゐる。

私は書生の時分、此處に來ては、よく瀧を探つて歩いた。日光には四十八瀧などと言ふが、詳しく探つたら、もつと澤山あるかも知れない。寂光の奥に一の瀧、羽黒瀧などといふのがある。含滿の裏山に素麵瀧といふのがある。霧降の上流に眞黒瀑といふの

がある。中禪寺湖の向ふに黒檜瀧といふのがある。中でも、私の眼を驚かしたのは、日光から富士見を越えて栗山に行く間にある三界瀧である。

近く寄つて見る瀧ではなく、餘程離れたところから見る瀧だ。それでゐて、かなりに大きく見える。三四十丈はあるだらうと思はれるやうに見える。

普通の旅客が通つて行く路にも、全く閑却された瀧がかなりにある。深澤にある朝日瀧などはその一つてある。華嚴の瀑底に行く路にある白雲の瀧は好い瀧である。涅槃の瀧といふのも一寸異つた感じのする瀧である。

華嚴の瀑底から見た眺望は、雄大崇高を極めてゐる。星野五郎

平翁の功空しからずと言つて好い。しかし、瀑壺の深く藍を湛へてゐるさまは、寧ろ此處からよりも上から見た方が好い。華嚴の上の茶屋から一町ほど下つたところから、柵に凭り木に凭りして覗いて見る方が好い。そこから見下すと、瀑に引込まれるやうな氣がする。

私は十日ほど前　中禪寺から舟で歌が濱に行つた。

歌ケ濱には私は獨歩と二週間ほどゐた。昔なつかしいところである。昔は小さな堂があつたばかりであるが、今では、此方側になつた立木の觀音堂が其處に移されて行つたので、立派な朱塗の堂が出來かゝつてゐた。大工が頻りに釿をつかつてゐた。

竹矢來で圍つた中に私は入つて行つた。堂はもう大抵出來上つてゐた。立木の觀音のある所には幕が張つてあつた。

私は內陣の中に入つて、名高い立木の觀音を仰いだ。

この木像は勝道上人の手づから刻したものだと言はれてゐる。勝道上人は天平時代の僧で、始めて二荒山に登つた人である。

私はこの前にもこの木像を見たことがあつたが、今まで分明とその印象が頭に殘つては居なかつた。これほど見事なものだとは思はなかつた。觀音の像としては、顏が少し恐ろし過ぎるとは思ふが、粗野な彫刻の中に一種の犯すことの出來ない力がこもつてゐて、向つてゐると、崇高な心持が起つて來る。

殊に、眼と眉との間に、何とも言はれない深い影がある。『好い

ですね。立派ですね。矢張、刻んだ力の上に宗教が立派に働いてゐますね』

かう私は一緒に來た人に言つた。

其人は話した。『これが向ふの中禪寺の方にあつたんですが、先年の水害に堂は倒れて、すつかり木像も壞れて了つたんです。それでも頭だけ完全に殘つてゐたもんですから、兎に角にこれまでに修繕することが出來たんです。あの頭があれで八疊敷一杯位ありますからね』

『そんなに大きいですかね』

私は驚いたやうな心持で、再びその顏を仰いだ。

私は境內を彼方此方と步いた。私が獨步とゐた小さな家は、依

然として殘つてゐて、その一間の障子には午後の日影が明るくさしてゐた。私は舟で獨歩と一緒によくこの湖水を漕ぎ廻つたことを思ひ出した。深夜眼が覺めて外に出て見ると、湖水が一面の月の光になつてゐたことなどをも思ひ出した。

此處から見た男體山は、すつかり其谷や裾や樹木を露はに見せてゐるやうなものであつた。二條、三條、赤く薙いでゐるところなども分明と見えた。麓にある瀧洒な中禪寺の旅館は殆ど明るい湖水の上に浮んでゐるやうに見えた。

麓の茶屋で休んでゐると、矢張其處にゐた一人の車夫が赤い實の一抔についた苔桃を手拭の布端に包んで持つてゐた。

『今日お山に登りやしてな……澤山ありやすよ』

かう言つてゐた。

東京に持つて行つて栽えて置いてもつかないものだらうかなどと私は訊いた。『霧の卷くやうなところでなくつちアなア』かう車夫は危むやうに話した。

細かい赤い實と厚い細い綠の葉とは尠からず私の氣に入つた。山の上でなければ育たないといふ話も面白かつた。私は私の僧房に栽て置かうと思つて、半分ほどわけて貰つて歸つて來た。

『水氣の多いところでなくつては駄目ですよ』かう車夫が言つたのを思ひ出して、私は日に二三度づゝ水をやつた。

ある夜遅く月が私のゐる谷の中にさし込んで來た。私は崖の上に立つてそして前に展けられた谷を眺めた。

月は丁度谷の上流を照してゐた。私の立つてゐる前の谷は、前の山の影になつて暗く暗く見えてゐた。水の流れるのが唯白く見えるばかりである。

此處にゐては、殆ど月を見るやうなことはなかつた。餘程よく晴れた夜でも、雲は峰から峰へとかゝつてゐた。『今日のやうな月は滅多に見られない』かう思つて私は長い間其處に立つてゐた。

私は山内にある寺をあちこちと見せて貰つた。靜かな好い寺ばかりである。こんな寺をかうして戸閉めにして置くのは惜しいと

思はれるやうな寺ばかりである。

ある寺では、私は崖の上のあるところに立つて下を見下してゐた。大きな杉の森が前にあつて、右の方には、稻荷川を越した山が遠く見えてゐた。外山の獨立した姿がすぐ前に聳えてゐた。その庭には石楠花だの檜だのの槇だのが栽ゑてあつた。葉の大きい楓はもう半ば紅葉してゐた。

ある寺は谷を見下ろすやうな位置にあつた。室といふ室に日が明るくさし込んで、庭の眞中からは噴水が高く颺つてゐた。大きな自然石の手水鉢から綺麗な水が溢れて流れ落ちてゐた。その寺の和尙さんは、『何うも外國人に借すと疊をわるくして仕方がありません。新しく取替へた疊が二月でかうなつて了ふんですからな』

などと言つてゐた。

ある寺は谷と谷の間に挟まるやうになつてゐた。其處からは何も見えない。世の中の何の音もきこえて來ない。いかにも深山の中にある寺のやうな氣がした。其處の和尙さんは老僧で、圍爐裏傍に私を座らせて、『まア何もないが、一杯何うです』と言つて後の棚の上から盃を取つて私に勸めた。

本坊の庭は見事なものであつた。前の山を自分の庭に取入れて了つたといふ樣なつくり方がしてあつた。水の豐富なのが何よりもあたりを明るくした。池には到る處から、水が落ちて來てゐる。

十七日は秋の祭禮で、他で見られない儀式があると云ふ話だつ

た。その日の朝であつた。私はなくなつた卷烟草を買ひに例の東照宮の前まで行つた。廣い通りに、物賣店などがチラホラ出てゐる。開けたことのない本坊の長屋が明放されて、そこに幕などが張つてあつた。六双屏風が二つも三つも置いてあつた。門跡始め、一山の僧侶が此處で神輿の渡御を見送るのださうだ。

ふと見てゐると、彼方の路や此方の路から、鎧武者だの鎗持奴だの、上下を着て刀をさして武士だのが、一人々々出て來た。それが少なからず私の興味を惹いた。何となく滑稽な氣もした。

郵便箱の前では、若い鎧武者の群がピカ〳〵する鎧を朝日にかいやかせて、そして何か笑つて話してゐた。中には十三四の子供の鎧を着たのなどもあつた。

昔から東照宮の御領分といふのが、この町から近在にかけてあつて、祭禮の時には、皆かなり催されて、一里も二里も先からやつて來るのであるといふことを私はかねて聞いて知つてゐた。鎧武者、鎗持、太鼓、侍――さういふ風に家柄によつて持役がきまつてゐて、その祭の前の日に、その衣裳や鎧を皆な社から其の家々に届けてやることになつてゐるのださうである。そして、その衣裳や鎧や何かは、皆な東照宮の中の三神庫の中に不斷は藏つて置くといふことである。

それは丁度十一時頃であつた。私が机に向つてゐると、ワッショワッショといふ聲がすぐ前の通りでした。『榊を持つて迎へに行つたんだな』かう思つた私は、着物を着改へてそして急いで出かけた。町から榊を持つて迎へに行くと、間もなく神輿が渡御になるのだといふことを私は聞いて知つてゐた。

門前には群集がもうぞろ〳〵通つてゐた。いつの間に、何處からこんなに人が集つて來たかと思はれる位であつた。私は曲り角のところまで行つた。東照宮の前の廣い通りには、兩側に人が一杯集つてゐた。ホテルで拵へたバラックの中には、椅子が澤山に置いてあつて、早く來た外國人が既に其處に腰をかけてゐたりした。あとからあとから人がやつて來て、曲り角のところは忽ち身うごきも出來ないほどの群集になつた。

巡査が『こら其處に立つちやいかん。電柱から前に出てはいかん』などと絶えず制してゐたが、それでもあとからあとへと人が

遣つて來ては其處に立つた。

私の立つて見るところからは、東照宮の正門が眞直に見えた。門の金ピカがピカピカと光つて見えてゐる。青い衣を着た雜掌が、澤山そこに集つてゐるのが見える。門の中ではいろんなものが行つたり來たりしてゐる。旗が見えたり、鎧が光つたり、鎗が見えたりしてゐる。

大勢の雜掌が華表の前の石段のところまで下りて來てゐるが、それが容易に動かない。『もう出さうなもんだがな』などゝ待勞れたやうに誰もかれも言つた。

『もう來る、もう來る』

かう言つて、あきて泣き出した背の子を賺してゐる母親などもあつた。

雜掌が漸く歩き出したかと思ふと、またぴたりと止まつて了つた。一直線に並んでゐるので、三四十人並んでゐるが、それが一かたまりになつて見えた。さしてゐる刀がはり鼠のはりのやうにツンツンと見えてゐる。

しかし待つてゐる間もさう大した長い間ではなかつた。雜掌はやがて一歩々々靜かにこつちに歩いて來た。あとから鎗だの旗だのがつづいて來た。

正面には、神輿のピカ〳〵光つてゐるのが長い間動かずに見えてゐた。

何といふ古風な儀式だらう。古い祭禮の儀式を私は彼方此方で

見たことがあるが、これほどすぐれたものは今までに私は見たことはなかつた。私は千年も前の昔の人の中に入つたやうな氣がした。自働車があつたり飛行機が上つたりする今の時代とは思はれないやうな氣がした。

一番先に雜掌が來た。つゞいて鎧武者が來た。派手な赤い鎧が美しく日にかゞやいて見えた。次に鎗が來た。馬に乘つた神官がその後につゞいた。天狗の面だの狐の面だのをかぶつた行列が二三十人つゞいた。上に載せた面が落ちさうで困つてゐるものなども中にはあつた。次に鉾が來た。太鼓が來た。一步毎にドンドンと太鼓は鳴つた。

又、馬に乘つた神官がやつて來た。可愛い稚兒が五人ほどつゞいて來た。其頃には、神輿がもう餘程近くなつてゐた。ピカピカした金具が秋の日に美しく照りかゞやいて見えた。

私は曲り角から塀づたひに人をわけて、私のゐる寺の門のところに來て見てゐた。其處で私は私の前を揉むやうにして通つて行く神輿を見た。

神輿のあとからは、今は芝居でなければ見られないやうな長柄の赤い傘をさしかけた馬に乘つた神官が行つた。それが東照宮の宮司であるといふことは後で知つた。

私は多くの群集に交つて、長坂の傍にある御旅所の方に行つた。いつもさびしい山内にこんな賑やかな雜踏があるかと思はれるやうな雜踏を押わけて私は石段を下りて行つた。町から近在へかけ

ての娘達は、皆な晴れの衣裳を着て、そして祭禮を見に來てゐた。町の藝者なども其中に交つてゐた。

御旅所は今日は綺麗に掃除されてあつた。紫の幕などが張つてあつた。行列が大抵入つて了つた時分、揉みに揉まれた神輿は、其入口のところで上へ下へと荒れ廻つてゐた。ワイショ、ワイショイ、かう云ふ聲が賑やかに四邊にきこえた。汗になつて團扇で煽いでゐる人なども見えた。やがて神輿は奥の拜殿へと納められて行くのが見えた。

それから三十分ほどすると、私は御旅所の上の方に當る寺の庭で、そこから一目に見える拜殿の方を見てゐた。和尚さんと、若い書生と、それに老いたお婆さんと私と、これだけで其處から見

てゐた。東遊と云ふ日光特有の舞踊がこれから始まるのであつた。『もうお膳が上つたかえ？　お膳が上れば、もうすぐだ』などと和尚さんは言つていた。

『さうです、あの拜殿の前の舗石のところで踊るんです。何ア に、大したことはありませんよ』などとも言つた。

『中々始りませんな。これぢや、ビール位欲しくなりますな』若い書生はこんなことを言つて笑つた。

私の前には、群集で充たされた阪があつて、その向ふに柵があつて、それから一目に御旅所の中が見えた。舗石の手前には、中に入る許可を得た人達が一杯に並んで立つてゐた。外國人なども澤山に入つてゐた。

やがて赤い裝束をつけて衣冠束帶をした神官が四人一齊に裳裾を長く引いて、そこに出て來た。

『あの人達が踊るんですか』

かう私はきいた。

『さうです。あれが踊るんです』

篳篥と琴と拍子木の音につれて、其人達は靜かに舖石の四隅へと其身を運んで行つた。靜かな柔らかな古風な踊はやがて始まつた。兩方の袖を合せて體を輕く浮かせて、靜かな樂の音につれて踊るさまは私の心を惹くに十分であつた。藤原時代の面影などが私の眼の前に見えるやうな氣がした。

『いかにも古風なもんですな』

かう私は和尙さんに言つた。

『あれで拍子木を打つ役が中々むづかしいんださうです。餘程老巧でなければ出來ないんださうです。』

私は眼をそれから離さなかつた。其人達は後向きになつたり、身をそらすやうにしたりした。體を長く延すやうにしたりした。しかし全體が靜かでのどかで、いかにも優長な時代に行はれた踊だといふことはよくわかつた。赤い靑い小さい姿が私の眼の前にチラチラした。

その踊は二十分位ですんだ。私は和尙さんに禮を言つて、私の寺へと歸つて來た。今まで集つてゐた群集はいつ何處に行つたかと思はれるほど山門は靜かになつてゐた。それから一時間ほど經

つと、また門前で、ワットいふ聲がした。神輿が今かへるのであつた。私は門のところまで出て行つて見た。行列は矢張前の通りに來てゐるが、もうそれを見送る群集もなかつた。山内はまた元の寂寞にかへつて、參詣者がをり〳〵通つて行くばかりである。

靜かな秋だ。

私は、やがて冬になつて行く山のさびしさを想像した。紅葉の時と言つても、もうそれはすぐである。そして色がついたかと思ふと、すぐもう散つて行くのである。これから何遍時雨が來るだらう。そして山の頂はやがて雪で埋められるであらう。男體と、女峯とに雪が旗のやうにかゝるのももうすぐだ。

私の前にちよろ〳〵落ちてゐる筧もやがては氷つて來なくなつて了ふのであらう。落葉がこの廢寺の庭を埋めて了ふであらう。私は火燵の上に板を置いて、そして酒を飲んでゐる山の人達の生活を想像した。

山は山でなければ見られないやうな景色を時々私の前に展けて見せた。その中一番變化に富んでゐるのは雲と霧である。天氣の好い夕方などには、雲は赤い鮮かな色をつけて私の前の山を美しく彩つて見せた。かと思ふと、忽ち黒い雲が男體山の方から押寄せて來たりした。

男體と女峰とがはつきり見える時は滅多にない。何んな好い天

氣でも大抵は半段以上雲につゝまれてゐる『冬の晴れた時分ですね、一番よく見えるのは――』かう町の人が私に話した。

いつか非常に荒れた日があつた。前の山を雲と霧とが早く早く掠めて行つてゐるが、雨が強く烈しいので、雲が切られて丁度大名縞のやうになつて見えてゐたことがあつた。雨の降る日は、却つて私には樂しかつた。霧が白く軒先までかゝつて來て、谷の音が海の波の音ではないかと思はれるやうなこともあつた。私は肱椅子に腰をかけて、靜かに雲のかゝつたり晴れたりするのを見てゐた。

此頃では花もなくなつて了つた。一月ほど前には、山から書生が高山植物などを採つて來てさして置いて呉れたが、それもすぐ

枯れて萎れて了つた。九連草ももう末になつた。裏の畑につくつてあるダリヤももう葉ばかりになつてゐる。

十五夜の夜には、町の寺へ行つて、老僧を相手にして酒を飲んだ。老僧の室には、團子と薩摩芋とがちやんと供へてあつた。枝豆などを酒の肴にした。

さびしい山の生活だ。一人きりでゐると、一日口を利くことがない。仕方がないから、机に向つて筆を執つたり書を讀んだりする。此處にゐては、今日は日曜だか月曜だか、そんなことはしらずに暮すやうなことが多い。これで都から手紙さへ來なければ、――かう思ふことがよくある。

ある日山から來た人が話した。『此頃もう鹿が鳴きますよ。好い

聲ですね。丸で笛のやうですね』私はそれを聞いて、四五年前、山の奥の木小屋で一夜を過したことを思ひ出した。

痕

人間には誰にでも殻がつゐている。その殻を捨てゝ了ふ爲めに人間は一生を費して了ふのである。殻の取れた時分には、人間の體は生理的に陷落しつゝある。やうやく、殻が取れて萬象がはつきり見える時分になると、人間は既に死に面してゐるのである。皮肉と言つて好いか、矛盾と言つて好いか、癪にさはるッて言つて好いかわからないやうなものだ。

『一人の心と萬人の心』といふ言葉が一方にあると共に、『萬人の心は萬人の心』と云ふ言葉が一方にある。そして、それが兩方とも並存の權利を主張してゐる。

『隱居學といふのもこれで中々樂ぢやないもんですよ。何う日を送つて好いかわからなくつて困る。棋もあきる。盆栽も面倒くさくなる。酒もつまらない。さうかと言つて、一日ぼんやり日向ぼつこしてゐられない。隱居學と言ふものは中々むづかしいものですよ』かうある老人が笑ひながら言つた。かういふ人達も矢張箇

々生存の權威を以て生きてゐるものである。若い心でそんな生活は價値がないと言つて一概に却けて了ふことの出來ないものである。

『さういふ生活は、今では私達にはまだかけないが、さういふ生活も藝術にはなるんですね。さういふ生活が描けるやうな心持になるのも面白いと思ひますね』

かう私はある人に言つた。

センチメンタリズムといふことは、かうありたい、あゝありたいと思ふ願を誇張して、理想的から空想的になつて行つた形を、言ふのである。つまり殻の取れないといふ程度見たやうなものであ

る。私の考では、ツルゲネフよりもトルストイよりもドストイエフスキーの方に却つてセンチメンタリズムの分子が多いと思つてゐる。

若い人の心持は、現はれやうによつて多少の相違はあるが、多くはセンチメンタルであると思つてゐる。強く現はれてゐても、弱く現はれてゐても……

當て氣味の作が此頃は非常に多くなつて來てゐる。つまり社會とか讀者とか流行とか言ふものに作者が捉へられて行つてゐるのである。『何うかして旨いものを書きたい』これでさへいけないのに、今では『何うかして當るものを書きたい』といふ風になつて

行つてゐる。イヤな傾向だ。

他人のことをよくも知らないで、——また知らうとも思はないで、自分の勝手で何の彼のと言つてゐるものがある。烈しいのは、自分で、その他人をかうだときめて了つて、それで滿足してゐるものがある。さういふ人は世間によくある。知らうと思つてさへ容易に知れないと言つて慨嘆してゐる人もあるのに、知らうともせずに、さうときめて了つてゐる。無論さういふ人に人間のわかりやう筈がない。さういふ人には自己すらわからない。

寄居蟹のやうな隱遁的の氣分は必ず藝術家にはなくてはならな

いものだと思ふ。但し藝術家が廣い人生に觸れなくつてはならないといふことは言ふまでもないことである。或は寄居蟹のやうな隱遁的な氣分にゐるが爲めに却つてより多く人生に觸れて行けるのではないかと私は思つてゐる。活躍した世間の中に出て働いてゐるといふことゝは何等の交渉を持つてゐないと言つても好い位である。單に働いてゐたからとて誰でも人生に觸れられるといふものではない。その證據には人生の巴渦の中に沒頭してゐる人はくさるほど澤山あるが、そこからは何等の藝術も產れて來ない。だから、戰鬪、勞働などといふことと、藝術とはちよつと一緒に簡單に言つて了ふことが出來ないやうなものである。此處にも自己と社會との大きな問題が橫つてゐ

る。

人生に對する不理解やら年齢やらから起つて來る不安の念が段々除れて行つた時に、人は多くは大聲を擧げるものである。自己の發見のやうな叫聲を擧げるものである。さういふ時に限つて戰鬪、努力などといふことが多く口に言はれるものである。

そしてこの叫聲から實行が始つて來る。つまり描象的から具象的になつて行くのである。

同じ經驗を繰返しても、人は滅多に同じ經驗だとは言はないものである。皆な自分で新しく發見したやうに言ふものである。そ

の癖、科學は多くの實驗から出來上つてゐて、經驗者犧牲者のお蔭で、人間は毒草を食つて死ぬのを免れてもゐれば、鮹や海鼠のやうな形のものまで食ふことを敎へられてゐる。しかし、ベルグソンの言ふやうに、個人の經驗は實際箇人その人のみの發見であることは言ふを待たないことである。それだから、人間は生きて希望を抱いて行かれるのである。一から十まですべて同じでは、第一、自然の生殖の道が營んで行かれなくなる。箇人の生存は自然である。學問はその自然を解らずなりにも研究しようとするものである。學問は決して自然を律しようなどといふ目的のもとにあるものではない。藝術でさへさうである。

人間の注意力といふものは、存外徹底してゐないものであるといふことを此頃考へた。人間は毎年毎年同じやうなことをしてゐて、それでゐて毎年新しいことをしてゐるやうな氣がしてゐる。人間はあらゆることをすぐ忘れて行つて了つてゐる。しかしこれが爲めに——この忘れるといふことがあるが爲めに、其時々々が新しく感じられて、それで面白く生きて行かれるのであるかもしれない。

日記などを出して見ると、殊にさういふことが深く感じられる。四月の處を見ると、毎年、其時分には、屹度同じやうに花が咲いて、風が吹いて、雷が鳴つて、霰などが降つてゐる。同じ日に同じやうにして上野から淺草の方に花見に行つてゐたりする。やつ

てゐる仕事なども大抵同じだ。ある雜誌記者が小説を頼みに來てゐるが、今年も矢張、其と一日おきにその雜誌記者が來て小説を頼んで行つた。これに限らず萬事が皆さうだ。

それであるのに、人間は天候のことにさへ完全な徹底した注意力を拂つてゐないで、今年は風が強いなどと云つてゐる。今年のやうな雨の多い時はないと言つてゐる。實は毎年同じことなのだ、大差がないのだ。花の咲く時分に、雨や風の多いのは千年も二千年も前から言つてゐるのである。

しかし、私の經驗から押して行つて見ても、この簡單な四季折々の變遷などですら、近頃やうやく分明と、その節々の天候がはつきりと分つて來たやうな氣がするのである。それほど人間は忘

れ易いのである、刹那的に無意味に日を送つてゐる人間の多いのも無理はないと思はれる。

或は知識なしに、理解なしに、無意味に日を送つて死んで行く方が人間として幸福なのかも知れないと思はれる位である。

理解――惓怠――隠遁――さういふ形式になつて行つてゐる。聰明な人ほど功名の念に薄いと言ふのもそれである。理解と知識とは生命を生かし、また亡ぼしてゐるやうな形になつてゐる。だから、縦から見て、理解と知識が生存に必要な時代と、生存に有害な時代とがあることを知らなければならない。死に面したものには、理解も知識も氷のやうになつて溶けて行つて了ふ。

矛盾と撞着と不徹底とを笑ふ人が世の中にはよくある。いづくんぞ知らん、さういふ人が矛盾と撞着と不徹底との自然の中に安じて住んでゐるのである。

稚樹の生長は見てゐても氣持の好いものである。四五年の中に、忽ち老木を凌ぐやうな勢を見せて來る。幹にも葉にも姿にも、生々とした氣が漲つてゐる。しかし、氣持が好いといふだけで、しつかりした氣分が乏しい。枝や幹などにも屈曲した趣致がない。長く見てゐると、その單調なのにあきて來る。

ある木に私は肥料をやつた。と、その翌年には、その木は非常な勢を見せて、葉がこんもり枝一杯に繁つた。見るも好い氣持であつた。ところが五月のある烈しい風に逢つて、他の木はちやんとしてゐるのに、其木ばかりは意氣地なく倒れて了つた。根が肥料に緩んでゐたのである。それに、餘り勢に乘じた葉の繁茂が烈しく風を一層烈しく受けるやうになつたのである。

『面白いもんだね』

かう私は家の人に言つた。

一角を辛うじてつかみ得て、それを世間に報告すると、世間ではそれをその人の『總て』であるやうに言つて了ふのが習ひである。人間はある種の報告をも、すべて『完成』したものとして受取る癖がある。それほど人間は完成したものを好んでゐる。

その癖、世間には完成したものなどは一つもないのである。自然が既にさうである。人間がすでにさうである。あらゆるものすべて不完全である。

主義と主義との爭は、だから『不完全』と『不完全』との爭ひである。『一角』と『一角』との爭である。いくら意見を戰はして見ても、仕方のないやうなものである。寧ろ『一角』を一角とし、『主義』を主義として、不完全な内容を豐富にするやうな考へ方をしたいと私は思つている。

ある事件の過ぎ去つた跡と言ふものは、不思議な考を人に起させるものである。此頃は私は『跡』と言ふことを深く考へた。跡はその事件の起つてゐる當時にあつては、その事件の背景となつてゐたものである。事件が去つて背景ばかりになつたのが跡である。

いろ〳〵な人間がその跡の上を通つて行つてゐる。女もあれば男もある。熱い心もあれば恐れ戰いた心もある。その舞臺の悲劇の中であはれな最後を遂げたものもある。それらがいつともなしに過ぎ去つて行つて了つてゐる。そんなことがあつたかと思はれるやうになつてゐる。野には雲雀が揚つてゐる。夕日は落ちつゝある。

「さういふことがあつたと思へないね、何うしても……」

「本當に、さうだ。夢のやうだ」

「あの今來た老人がその事件の中の一人で、まだ若くつて、毎晩通つて來る女があつたなどゝは何うしても思はれない」

「實際さうだよ」

「僕等の後にもすぐ『跡』だけが殘るんだね、それを思ふと、不思議な氣がするね」

「跡ばかりを書くと面白いね」

私は『跡』といふことを三日も四日も考へてゐた。

廣い空間

問題文藝の提唱を始める前に、私達は今の日本に於ける社會問題、社會と個人との關係、國民性の素質と心理、さういふものを研究して、それが何ういふ風に作の上に現はされて行くべきか、又は果してそれが完全に藝術品を構成して行き得るか否か。所謂、社會と個人との複雜した關係の上に、何れだけの深い重要な問題と題材とが籠められてあるか。さういふものをも研究せずに、徒に提唱ばかりしたところで、それは何の效もないといふものである。

私達の經驗では、問題的部分は、深く個人と社會との關係に入つて行けば行くほど、社會に屬した方面は稀薄になつて、個人の心理に屬した方面ばかり跡に殘るのを發見せずには居られないのである。深く突詰めれば、社會といふものはなくなつて、個人ばかりがその底から現はれて來るのである。そしてその個人が充分に現はれて、徹底した形を帶びて來れば、社會とか問題的とか言ふことはすつかり消えてなくなつて了ふのである。解決がつかないと言つて悶えてゐたことが、ぐん〳〵解決されて行つて了ふのである。イブセンの戯曲などに、煮えきらない無解決の多いのは——問題の提唱にとゞまつてゐるやうな作品の多いのは、畢竟その個人を深く考究しないからではあるまいか。

私達の作品の背景は、第一義的に言つて、決して社會であつて

はならない。更に進んで、生活であつてもならない。或は人生であつてもならないかも知れない。何故と言へば、社會以上、生活以上、人生以上に更に大きなものがあるからである。社會、生活、人生、それを包擁した大きな空間が私達の背景を成してゐるからである。

現代の多くの作家を例に引いて見てもわかることである。ある作者は、社會に突當つて悶えた。ある作家は生活につき當つて苦んだ。ある作家は人生を對照にして煩悶した。しかし、それ等よりも一層すぐれて深いのはひろい空間を對照にした形である。現に、あの社會ずきの問題ずきのイブセンすら、晩年には、そのひろい空間に對する煩悶を見せてゐるではないか。『ボルクマン』や

『われ等蘇生の日に』などは、その完全な例として引かれ得べきではないか。『社會柱』『人民の敵』とかいふ作から『鴨』『幽靈』になり、それから『小アイオルフ』『海の夫人』になり、段々『ボルクマン』あたりになつて行く作者の心の徑路は、優に、社會、生活、人生、ひろい空間といふことを年代的に見せてゐるではないか。

問題文藝可なりである。しかし、それは作者が自己を築き上げる道程の一里塚としてのみ許さるべきである。問題文藝が起ると起らないとは、藝術には何も關係もないのである。

これを横から言つて見る。ある社會では、社會が個人を壓した。

ある社會では、個人が社會を壓した。時には、社會にのみ個人が執着して、生活も人生もひろい空間も見えないやうな時代もあつた。さういふ時には、社會劇、社會小說がさぞ盛に起ることであらう。しかし、それは藝術には、何の影響をも起して來ない。藝術は矢張藝術である。

フロオベルは『ホヴリー夫人』で滿足してはゐなかつた。あの作は一面社會的で一面個人的であるけれども、あれだけではかれには滿足は出來なかつた。かれは『セント・アントニイの誘惑』『ブバール エンド ペキユッヘ』に見せたやうなひろい空間を背景にしたものまで行かなければ、承知が出來なかつた。J. K. Huysmans

も矢張さうだ。『途上』でも『大寺院』でも皆なそのひろい空間に向つて突當つて行つた作者の煩悶だ。

社會から生活、個人、ひろい空間——すぐれた作者は、皆さうした深い考察と煩悶とを見せてゐる。

ハウプトマンの『エマニエル・クイント』なども、矢張さうだ。あの作を『寂しき人々』『日出前』なぞゝ比べて見ると、作者の考察と煩悶とがいかに社會、個人からひろい空間に向つて行つたかといふことがわかる。作者はさびしい心を抱いてひろい空間に對した。今まで悶えた社會と生活から離れて、さびしく心を空間に向けた。

かういふ例は、探したなら、まだ澤山にあることだらう。しか

し、これをメイテルリンクの對自然、對運命、對死など比べると、そこにはまた餘程の相違があるのを私は見る。メイテルリンクの對空間はシンボルとしての對空間であつて、まだ根本から動いて行つたものではない。作者の具象した方面が自然に流露して來たのではなくつて、抽象した方面から、あゝいふ形式を見せたといふやうなところがある。

トルストイの晩年の行動も矢張そのひろい空間に對する大きな煩悶である。そこには如何ともすべからざるものがある。嚴として横つてゐる。

問題文藝を説く人達は、さういふ境を考へて見なければならな

い。フロオベルの『シンプルハート』などといふ作や、ゴンクールの『ルネ』や『シスターヒロメーヌ』や、さういふ作がゾラやドストイフスキーの大きな作などに比べて、どれだけすぐれた價値があるかといふことをも考へて見なければならない。

しかし問題文藝を起せといふ提唱は、一面理想を起せといふことであるらしい。昔の幽靈が再び現はれて來たといふ現象である。『太陽』の批評家は、割合によくこの間の消息を説いてゐる。凝滯變せざる今の作家の心境にあきたらない態度はよく見えてゐる。作者は無論この道理のわかつた註文に耳を傾けなければならない。しかし、批評家の所謂 Perspective を闕いてゐるといふことに就いては、あながち異論がないとも言はれない。人間生活の内容の

解釋などにも、非常に違つたやうなところがあるやうな氣がする。

藝術と人生との問題は却々難かしい。『早稲田文學』に出たメレジコウスキーの議論は、再び私にその問題を繰返して考へさせるヒントを與へた。しかし、メレジコウスキーの言の如く、藝術と人生との間に横はるものは宗教だらうか。果して宗教と名をつけて好いやうなものだらうか。

ブロークの言ふやうに、藝術と人生との間には確かに無底の深淵が横つてゐる。觸れさうでゐてそして觸れない。また同一のものであつて、そして同一のものでない。藝術と人生との關係ばかりではない、藝術家と生活との間の關係もまたさうである。それを

メレジコウスキーは宗教に持つて行つて、そしてこれを一緒にした。しかし私はそれを宗教とは言ひたくない。宗教にしたくない。そして一緒のものであるやうにして置きたい。さびしくても好い。辛くつても好い。孤獨で堪へられなくつても好い。フロオベルのやうな死に方をしても差支がない。何故と言へば、その深淵から浮び上がれば、宗教と言ふやうなものでその間を結び附ければ、藝術は忽ちそこを離れて了ふからである。

藝術と共に離れたい心と人生と共に即きたい心とこの二つの心は何うしても矛盾した活闘と悲劇とで、この私達の生命の中に絶えず暗い光線を投げて行くのであらう。離れ難ない歎き、即き難

い苦しみ、矢張私達は灰色の暗い壁に閉ぢこめられて、何うすることも出來ない境に住はなければならないのではあるまいか。

『別種の神聖の意義に滿ちた生』とメレジコウスキーは言つてゐる。しかしこの生がさう簡單に得られるだらうか。簡單に得られる人もあるであらうが、私には何うもさうは思はれない。また一方では眞面目に考へて、さういふ生があり得るとも思はれない。

曾つて『フロオベル論』の中にもさういふ議論のあるのを見たが、何うも私にはさういふ風に簡單に思はれない。

孤獨——そこからのみ藝術のまことの淨い泉は湧いて來る。

他を描いて類型に墮ちた作品を見る度に、私はその作者が自己の研究と解剖とに十分でないことを考へて自から戒める。

『考槃餘事』といふ小冊子を私は古い本箱の中から搜した。

いろ〳〵なことが書いてある。書箋だの墨箋だの筆箋だの硯箋だの琴箋だの起居器服箋だのといふ目があつて、何處の紙が書に適してゐるの、何處で出來た墨が好いの、何ういふ硯が好いの、何處の木で拵へた琴が好いのといふことが短かい旨い氣のきいた漢文で書いてある。琴を研究した章などは殊に面白い。古琴の上に現はれた斷紋などを書いたあたりは殊に藝術的である。國を異にし、年代を異にした人に、かういふ細かいなつかしい研究——むしろ藝術的研究のあるのは面白いと私は思つた。私は病床に横り

ながら、支那の茶の産地、茶の光澤、茶の種類などゝいふ細かい觀察と研究とを其處に見た。

『さう捨てゝ了はないで、努力したいと思ひますが』かうある女は言つた。

理想に生きる女、努力に生きる女、さういふことを私は他日ある人と話した。『何うしても女はさうです。其處が男と女との違つてゐるところです。努力が根本ではない。理想が根本ではない。もつと先きがある。無類の努力の上に築かれたあきらめ、そのあきらめを人はよく消極的だと言つて笑ひますが、そのあきらめは、努力を無數にやつたあとに起つて來た氣分だといふことを考へな

ければなりません。努力に絶望しない女は憐れむべきものではあるが、智者とは言ふことが出來ない。女には意と智とが乏しい。或は全然ないかも知れないと思ふ』こんな話を私はした。努力の空しいことを感ずる心に、始めてひろい空間がひらけて來るといふことなどをも私達は話した。

何を措いても、作者はその心境を磨かなければならない。かくさうとしてもかくすことの出來ないのは、その作者の心境である。そしてこの心境がいつもその藝術に最も主要な背景を添て來る。かういふ感じがした、あゝいふ批評は、皆その心境に對して、ひとりでに起つて來る言葉である。

従つて批評家は、その批評をするに當つて、先づ第一に、何より先に、この作者の心境に入つて行かなければならない。材料の大小、内容の淺深、さういふことも無論あるにはあらうけれど、唯さういふものを眞向から振翳して、むきになつて、藝術品に向ふといふことは、決して細心な批評と言ふことは出來ないと私は思ふ。題材も内容も肝心ではある。しかし最も尊むべきは、作品の背景を成した作者の心境であることは元より言ふを待たない。私達はさういふ細緻な批評のいつもわが文壇に乏しいのを憾みとする一人である。文壇何ぞ題材論、内容論の多きことよ。とかう私は言ひたくなる。全體ならば、社會的、問題的といふ風に文藝を見ることよりも、個人的、心理的といふ風に深く入つて行か

なければならない筈であると私は思ふ。

海とトンネル

一

京都から山陰線へと乘替へる。いかにも山の中といふ氣のするところだ。丘陵と山村と灌木の林と崖と溪流と小さな停車場と唯それればかりである。昔は京都あたりで人を殺したりわるいことをしたりすると、皆な丹波の山の中に逃げたものださうだが、成ほどそんな處だと思はれるやうなどもの見える。荒蕪地の斜坂に赤い躑躅が澤山に咲いてゐるのなど

こゝまで來る間で、關ケ原の新綠が一番好かつた。昔の跡がすつかり若葉の綠に埋れ盡されたやうな感じがした。西近江の多い停車場を一つも寄らずに米原から一直線に大津へ向つた感じも好かつた。比良の山の襞にはまだ殘雪が白く見えた。

私の乘つた汽車に、中年の女同志が五六人乘つてゐた。皆な子供を成長くしたり、娘を嫁げて了つたりして半は人生のつとめを終へたやうな人達であつた。見得も氣がねも何もなかつた。それに大勢といふことが彼れ等の氣を強くした。勝手なことを饒舌つたり笑つたりしてわるくはしやいでゐる。謠本を出して拙い節を一緒に唸つたり何かしてゐる。女にはその年格好になつて始めて自由な樂しい一種の生活があるといふことを私は想像した。續いて私は長い間子供を負つたり乳をふくませたり泣いたり喚いたりして通つて來たかれ等の生活を想像した。

中にはかなりの旅行家があつた。越後に、北海道に、吳に、息子や娘が行つてゐて、年中旅をしてゐるなどゝ話した。複雜した交通網の連絡などもかなりに知つてゐた。後には、その婆さん、扇などを持つて、仕舞を踊る眞似などをした。

二

琵琶湖はいつ見ても感心しない。水の色の衰へなどといふことを感ずる。老衰し、沈滯し切つたやうな湖水だなどと思ふ。

保津川の谷は規模がいかにしても小さい。折れ曲つてゐる形は

面白いが、矢張京都式に狭くコセ〳〵してゐる。雄大な氣象などはとても求めることが出來ない。龜岡の盆地ののんびりした氣分はちよつと好かつた。愛宕の裏の連峯に白い雲が消えたりかゝつたりしてゐるのを見た。

殿田をすぎて胡麻から和知に行く。和知川の上流は、溪流と言ふよりも、平野の流といふやうな感じを起させる。平らに流れてゐる。綾部驛はこの丹波のうら山の中をやつと出たやうな感じのするところである

三

此處まで宮津のある旅館の海に面した室で書いて、それから橋

立を見に行つた。歸つて來たのは正午近いころである。と、宿の若い青年が、

『T先生ではありませんか』

といふ。文章世界の愛讀者で、土地にも二三人仲間があつて、中には女の愛讀者などもあるなどゝ話した。

『何うも、先生だと、入つてゐらしつた時から思ひました』

いかにもなつかしさうなのが嬉しかつた。で、いろいろな話をして、立つ時には埠頭まで送つて來て呉れた。『矢張、田舍にゐて眞面目に考へる方が好いですよ。無闇に東京に出たがつたつて仕方がありませんよ』などと私は言つた。島崎君の巴里にゐるのをなつかしがつて、

『藤村先生がゐないのでさびしい。いつ御歸りになるんでせうね』などと訊いた。旅でかういふ愛讀者に逢ふのはうれしい。扇面に記念に歌などを書いた。

橋立は好いところだ。三景の中で、瀟洒の感じのするのは、此處だけである。俗氣がない。長松の長く海中に靡いてゐる形はいかにも藝術的である。さびしいやさしい當氣のないところは、他の三景に見ることの出來ないものである。しかし傘松の上の眺望よりも、橋立神社のある松の中を歩く時の方が一層心持が好かつた。淺い海に漂つた藻の上を舟の底が靜かに觸て動いて行く感じも靜かであつた。

丁度藤の花の盛りで、崖にも、樹の上にも、民家の軒にも、紫と白とが鮮かに咲いて見えてゐた。成相の下で舟を捨てると、あるホテルの軒は一面に藤棚で彩られてあるのを見た。

いくらか曇つてゐるので、船頭は笘を上に葺いた。その中に小さく跼つて、橋立の松の動いて行くのを見るのは樂しかつた。笘舟が行き違ふと、船頭は兩方から聲をかけて高く話した。

櫓聲が朝の海に靜かに響いた。

股くら鏡といふことは、天橋の景を天上に映じて見るといふやうな特色を持つてはゐるが、これを繪はがきにしたり、女などがやつてゐたりするのを見るのは、あまり好いものではないと思つた。成相の奥の山寺は靜かなところである。

文珠の切戸の間から白い帆が松の間を通して見える。波には鷗

が浮んでゐる。それがいかにもゆらゆらと樂さうに浮んでゐる。

『あゝいふ風にこの人生の波にも浮んで見たい』などと私は思つた。

宮津の町では、丁度山王樣のお祭で、屋臺が出來て、それが町中をねつて歩いてゐた。私は夜出かけて行つて見た。屋臺には一々山といふ號がついてゐる。松樂山、紅葉山、などいふ風である。つまり山車の山といふ意味である。それには屋臺に可愛い子供役者が綺麗につくつて坐つてゐて、するところに行つて、淨瑠璃入りの芝居をする。と、近所の人々は一杯にその周圍に集つて見物する。そしてそれがすむと、屋臺の前に二本ついてゐる長い太い綱を『えんや、えんや』と言つて曳く。屋臺のすぐ前には大人が調子を取つてゐて、綱の前の方には子供が大勢綱につかまつてゐる。つまり牛の代りに人間が屋臺を引くのである。

屋臺では、狐忠信などを七歳位の子が踊つてゐた。

『明日まで御出になつて御見物になれば、それは賑やかですが』などとその旅館の青年は言つた。

四

舞鶴宮津間の連絡船は、明るい好い感じのする汽船である。甲板の上にゐると、殆ど倦むことを知らない位である。行く時は、雨が降つて、甲板の上のテントから雨が落ちて、鼠色の雲が海と山とにわびしく蔽ひかゝつたが、歸りは、よく晴れて、由良川の

河口の砂の白いのなどが鮮やかに見わたされた。大江山の上には、雲が湧くやうに上つてゐた。

一體に徙崖が發達してゐるところだけに、海も山も凡でない。小さな岬のいくつとなく突出した鼻を通つて行く時には、波が凄じく岩に碎けて、海鷗がばッと飛び立つて行く。

大島、小島、『その底には、海松や珊瑚が一杯にありまさ。取ると、大したもんなんですがな』などと老船頭は話した。

天橋の外の海と中の海との對照も興味がある。中の海は丸で湖水で、藍色が薄いが、外の海は波が高く、白い波頭などが立つて見られる。傘松の上から見ると、笘舟や艀は鷗が水面に浮んでゐるかのやうに思はれる。すると跡を長く引いてゐるさまは、丁度鏡の上を針か何かで傷つけた痕に似てゐる。

五

汽車の中で、始めて原稿を書いて見た。此前にも、二三度やつて見たが、何うも動いていけなかつた。しかし、汽車の中で原稿を書く人の話は度々きいたことがある。汽車の中は落附いてゐて好いといふことである。私は城の崎から鳥取に行く汽車の中で、この原稿を書いて見た。

何うも動いていけない。しかし、それを強ひて書いて見る。何も經驗の一つだといふ心持でやつて見ることにする。兩膝を立てゝその上に固い平らな包を載せて、原稿紙を半分に折つてそして

書く。初めは旨く行かないが、その中に段々書けるやうになつて來る。成ほど却つて氣の散らないやうな心持がする。をり〳〵眼をあげて見るあたりの物象が飛ぶやうに動いて行くのも面白い。と、急に、トンネルが來る。暗くなる。半分書きかけた鉛筆を持つたまゝ、暗い闇の中を見詰める。やがてまた明るくなる。又書く。又暗くなる。又書く、又暗くなる。机に向つて書いてゐるのとは、凡て違つた變な心持がする。

その間には、海が見えたり、村が見えたり、山の影が紙の上を掠めて行つたりする。朝日がぱツと當つたりする。その間にも絶えず心が動く。萬象が動いて行くやうに動く。ちよつと未來派の繪のことなどを考へる。

城の崎から竹場を經て濱坂あたりまで來る間は、例の但馬因幡の高い山の横つてゐる所である。その間にはかなり見事な海山の勝がある。白帆が岩と岩との間に繪のやうに通つてゐるのなどが見えた。

しかし、思ふやうにはどうしてもかけない。つかみ方がぞんざいで、心と體とが矢張汽車と同じやうに躍つてゐる。室の中で書いた繪と、外氣の中で書いた繪と、汽車の中で書いた繪との區別などをも考へて見た。

けれど旅行中には、汽車の中が一番閑な時間があるわけである。宿屋についてからは書く氣になれないし、朝は心が急いで落附いて書いてゐられないし、汽車の中で、本當に書けるやうな習慣を

つければ、それが一番旅で文を書くのに好都合であるのである。
私はこの原稿を手はじめにして、少しやつて見やうと思ひながら
鉛筆を動かしてゐた。

ところが、ある大きな停車場に來ると、ドヤ〳〵と乘客が澤山
に入つて來て、自分は隅の方に押されたやうになる。汚い鬚や、
荒い唇や、臭い髮や、糸立についた埃や、大きな荷物や――さう
いふものに押されるやうに立つて、窓の戸に頭を凭せて、そして
小さくなつて、私は猶ほ書きつゞけた。

六

但馬の山の中は、感じの好いところが多かつた。丹波の山中な

どから比べると、同じ山の中でも餘程ひらけてゐる。耕作なども
よく行届いてゐる。それに、この山の中を流るゝ川は、皆な溪流
と言ふよりは、平野を流れてゐるやうな舟楫の通ずる川で、山と
山との間を別に大きな瀨も作らずに流れて行つてゐる。圓山川な
どはその特色を最も多く持つてゐる川である。八鹿から豐岡に出
て行くあたりのひろびろとした景色は、いかにも山から海を想像
させるやうな心持である。

城の崎は山陰線の汽車が出來てから、もとの木賃制度から一躍
して立派な宿泊制度になつた。新築の一ノ湯などは、頗る美事な
浴槽である。しかし、昔の靜かな質朴な氣分はもう見られなくな
つた。惜しいことだとも思ふ。